

## 新たな移民母村の誕生： パプアニューギニア華人のトランスナショナルな社 会空間

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Papua New Guinea, Chinese, migration, homeland, transnational social space 作成者: 市川, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003923">https://doi.org/10.15021/00003923</a>

## 新たな移民母村の誕生

—パプアニューギニア華人のトランスナショナルな社会空間—

市川 哲\*

Creating New Homeland: Transnational social space of  
Papua New Guinea Chinese

Tetsu Ichikawa

本稿は華人の連続的な移住により、もともとは移住先であった地域が、移民母村としての性格を獲得するという現象について論じる。そのための事例研究として、本稿は植民地期からパプアニューギニアに居住してきた華人（ニューギニ・チャイニーズ）に注目し、彼ら／彼女らの連続的な移住経験と出身地との間で取り結ぶ諸関係について分析する。パプアニューギニアにおける華人の流入は、西洋諸国によるこの地域の植民地化の過程で始まった。特にニューギニアの北東部を植民地化したドイツは、自国の植民地の労働力として華人を導入した。ドイツ領植民地は第一次世界大戦後、オーストラリアの植民地統治下に入った。1950年代後半以降、オーストラリアはニューギニアに在住する華人がオーストラリア国籍を取得することを認めた。これにより、ニューギニアの華人はオーストラリア国籍を取得し、子供たちにオーストラリアで高等教育を受けさせるようになった。このような状況により、ニューギニアの華人社会の生活様式やアイデンティティは次第に変容していった。1975年のパプアニューギニアの独立以降、華人はパプアニューギニア国籍を取得するか、オーストラリア国籍を維持するかを選択を迫られることとなった。ほとんどの華人はオーストラリア国籍を維持し、パプアニューギニアからオーストラリアへと再移住することを選択した。現在ではパプアニューギニアに居住する者よりもオーストラリアに居住する者の方が多くなっている。このように彼ら／彼女らは、中国からパプアニューギニアを経てオーストラリアへという、数世代にわたる移住を経験してきた。このような連続的な移住経験により、華人たちはそれぞれの国や地域に異なる意味合いを付与してきた。現在、中国と直接的な関係を持つ

---

\*国立民族学博物館外来研究員

**Key Words** : Papua New Guinea, Chinese, migration, homeland, transnational social space

**キーワード** : パプアニューギニア, 華人, 移住, 移民母村, トランスナショナルな社会空間

つ華人は次第に減少して来ている。その一方でオーストラリアに再移住した華人にとっては、かつての移民先であったパプアニューギニアが新たな移民母村としての性格をもつようになってきている。トランスナショナルな空間での連続的な移住経験は、移民母村と移民社会との関係を不断に変化させているのである。

The aim of this paper is to discuss the meaning of “homeland” for Papua New Guinean Chinese. In order to understand this meaning, the author investigates their experience of migration and their relationship with the place they think of as their homeland.

Papua New Guinea has had a Chinese community since the colonial period. The island of New Guinea was colonized by Germany, Britain and the Netherlands in the 19th century. Germany introduced Chinese as colonial laborers. After World War I, Australia took over German New Guinea and the Chinese came under the Australian colonial rule. The Australian government allowed the Chinese residents to acquire Australian citizenship in the late 1950s. After that most of the Chinese obtained Australian nationality and went to Australia for their higher education.

After the independence of Papua New Guinea in 1975, the Chinese started re-migrating to Australia. Those Chinese who already had Australian citizenship preferred to migrate to Australia, rather than to naturalize as Papua New Guinea citizens. Nowadays the community of Papua New Guinean Chinese in Australia is bigger than the one in Papua New Guinea.

The Papua New Guinean Chinese have migrated from China, and then re-migrated to Australia over several generations. As a result of this serial migration process, the Papua New Guinean Chinese have lived in three countries; namely China, Papua New Guinea and Australia. As a result of this experience of migration and settlement in the three countries, the Papua New Guinean Chinese attach different meanings to them. For the first generation Mainland China is their homeland, while the local born generation does not attach such importance to it. The younger generation who were born in Papua New Guinea do not have close contact with their relatives in mainland China. The significance of China, especially that of an emigrant’s village differs among the generations. Those younger generations who live in Australia tend to regard Papua New Guinea as their homeland.

1 はじめに	6 ニューギニ・チャイニーズとオーストラリア
2 トランスナショナルな社会空間と移民母村	6.1 パプアニューギニア独立以前のオーストラリアとの関係
3 華人社会と移民母村	6.2 独立前後のオーストラリアとの関係
4 ニューギニ・チャイニーズ	7 墓地と移住
5 ニューギニ・チャイニーズと中国	8 考察
5.1 第二次世界大戦以前の中国との関係	9 おわりに
5.2 第二次世界大戦後の中国との関係	
5.3 パプアニューギニア独立後の中国との関係	

## 1 はじめに

移民社会と移民母村との関係は、移民を対象とした文化人類学的研究の主要なテーマの一つとして採り上げられてきた。ある地域から別の地域へと移動することによって誕生する移民社会にとっては、現住地のみならず、もともとの居住地もさまざまな文脈の中で重要性を持つこととなる。そのため移民を対象とする文化人類学的な研究では、居住地と出身地の社会的な脈絡の中で、個々の移民の生活世界がいかにして構築されているのかが重要な問題となる<sup>1)</sup>。いわば、移民にとっての故郷のあり方が、個々の移民の生活世界の中でどのように構築されるのかが重要視されるようになってきているのである<sup>2)</sup>。

中国国外に居住する中国系住民である華人を対象とした研究では、移民母村である僑郷（華僑の故郷）と海外の華人社会との関係がしばしば研究対象とされてきた。こうした研究は、海外に居住した華人のコミュニティが出身地である中国とどのような関係を取り持つのかに注目することにより、対象コミュニティを空間的な広がりの中に位置付けることを試みるものであるといえる。

だが華人に限らず、移住が必ずしも一過性のものとして終わるとは限らない。ある人々がある地域に移動した後に、再び別の地域へと移動することはしばしば観察される現象である。そのため、一度移住先となった地域も、二次的、三次的な移動により、単なる移住先や通過点としての意味だけを持つのではなく、そこに居住したという直

接的な経験に基づく新たな意味を獲得する可能性がある。そのため移民にとっての移民母村の意味も、単にそこから人々が移住して行った土地としてのみ捉えるのではなく、それぞれの移民の具体的な生活経験の中で把握しなければならない。

上述の問題意識に基づき、本稿はパプアニューギニアをめぐる華人の国際移動に注目した事例研究である。現在のパプアニューギニアは東・東南アジア出身の華人が流入して居住すると同時に、オセアニアの他の国々へと再移住する人々が存在する。そのため現在のパプアニューギニアには複数の地域出身の華人が存在する。本稿はその中でも特にパプアニューギニア生まれの華人に注目する。後述するように、パプアニューギニア生まれの華人は19世紀末から20世紀初頭にかけて、ドイツやオーストラリアによるニューギニア地域の植民地化の過程で流入した人々の子孫であり、現在はさらにオーストラリアに再移住している。本稿はこうしたパプアニューギニアをめぐる華人の国際移動に注目することにより、連続的な移住過程の中に華人の移民母村を位置づける作業を行う。それにより、パプアニューギニアの華人の移民母村が、国際移住によって生じたトランスナショナルな社会空間<sup>3)</sup>の中でいかなる意味を獲得するようになったのかについて考察する<sup>4)</sup>。

## 2 トランスナショナルな社会空間と移民母村

現在、移民を対象とした研究は人類学における主要なトピックの一つとなっている。だがこうした状況は人類学史の中では比較的新しい状況であると指摘されている。小規模なコミュニティの社会構造や文化の意味のシステムの解明を目指していた20世紀中期以前の人類学的な研究では、移民のように本来の居住地とされる地域を離れた人々は、例外的な現象として扱われることが多かった(Lewellen 2002: 131)。だがこうした状況は現在では変化しつつある。ブレットは、移民を対象とした研究は1950年代から60年代に到るまではそれほど重視されなかったと述べる。だが人類学者が文化を、個別に境界付けられ、領域付けられ、相対的に変化がなく、一様な単位である、という見方を否定するに到り、移民について考察し理論化することが次第に可能になったと指摘する(Brettell 2000: 97)。例えば1950年代以降、イギリスの社会人類学者はアフリカのような旧植民地地域における移民や西欧における工業化された都市部における移民も対象とした研究を行うようになった(Eades 1987: 1-2)。空間的な移動を伴う移民を対象とした研究は、必然的に調査地を取り巻く大規模社会を視野に入れる研究枠組みを必要とするのであるといえよう<sup>5)</sup>。

また世界システムを始めとする大規模な社会的背景の中に調査地を位置付ける、ポリティカル・エコノミー論に代表される研究は、移民を対象とした人類学にも様々な影響を与えることとなった（大塚 1999; Kearny 2004）。前述したように、移民を対象とした初期の人類学的な研究では、ルーラルエリアから都市部への移住への注目がなされた。いわゆる低開発国におけるこうした人口移動は、国内の都市化や開発と密接な関係を持っていた。

こうした研究動向の中では、移民の移住先での経験が、移民母村にどのような影響を与えるのかという問題が重要視されることとなった。例えばカーニーは、移民と開発との関係に注目した人類学は、主に近代化論、従属理論、接合論という三つの段階を経てきたと指摘する。彼は、第二次世界大戦後から 1970 年代に到るまでの期間、移民を対象とした人類学的研究は、近代化論に影響されていたと述べる。この時期の研究は、村落部から都市部に移民した人々は、移民先で得た知識をもたらしことにより、村落における伝統主義を改革すると捉えられた（Kearney 1986: 333）。これに対し 1970 年代以降、移民研究でも近代化論に代わり、従属理論によるアプローチが主流となる。従属理論は近代化論的アプローチのような単純な進歩の概念に依拠せず、中心と周辺との不均衡な関係を明らかにした点で有効なアプローチだった。だがカーニーは、従属論的アプローチはマクロなレベルでの議論が中心となるため、人類学的な特定地域のフィールドワークには馴染まなかったと指摘する。従属理論は周辺から中心への余剰の流れに注目するが、移民が行う中心から周辺への金銭や物品の流れにはあまり関心を示さなかったためである（Kearney 1986: 340）。さらに 1970 年代半ばからは、移民を対象とした研究でも世界システム論的アプローチが盛んになり、非資本主義的生産様式の周辺社会を、資本主義が変容させるという見方ではなく、両者が共存し、場合によってはお互いに強化しあうという、接合論的アプローチから移民と開発との関係を捉え直す傾向が生じるようになった（Kearney 1986: 342）。

世界システム論的アプローチや接合論的アプローチに代表される、経済的な不均衡に注目することにより移民を分析する立場は、マクロな背景を視野に入れたものであり、その意味では有効なものである。だがそうした立場は往々にして一面的なものに陥りがちであり、実際の現象を説明する場合には様々な不備が生じることとなる。カーニーが、ミクロな経済を研究する上での世帯や親族関係の調査は、人類学者にとっての優先権であることが接合論的アプローチにより明らかにされた、と述べるように（Kearney 1986: 344）、マクロな背景を視野に入れながらも、親族や世帯等に注目したミクロなレベルに注目する立場は、人類学的な移民研究の利点になる。こうし

た研究では、調査対象をシステム内部に固定して捉えるのではなく、その主体的な対応を調査する視点こそが求められる（Ortner 1984: 142-143; Lewellen 2002: 190-192）。

ただし、フィールドワークによる実証的な研究をその特徴としてきた人類学にとって、研究枠組みの無制限な拡大には注意する必要がある。石川が述べるように、対面的な状況下でのフィールドワークを主要な調査方法とする人類学にとって、調査や分析の枠組みを無制限に拡大し、文字通りグローバルなレベルにまで広げることは困難をとまなう。むしろ、政治経済的なマクロな背景を視野に入れることにより、いかにして調査の対象となる地域でのミクロな実証的研究を行うかという、ミクロとマクロの接合が問題となる（石川 1993）。フィールドワークに基づくミクロな視点からの実証的な研究は、文化人類学の顕著な特徴である。だが同時に、ミクロな視点からの研究という研究態度は人類学的な研究にとって厄介な問題ともなりうる。移民は人の空間的な移動を意味するため、移民の生活世界は複数の場所との関係を持つこととなる。空間的な移動やコミュニティ成員の拡散を伴う移民を対象とした研究では、空間的に離れた地域間関係をどのように捉えるのかが問題となる。特定の移民コミュニティを研究するために、移民先と移民母村の双方を視野に入れることは、空間的な広がりを持つ移民の生活世界を研究する上で必要な視点である。

このような、移民社会を移民先と移民母村との相互関係の中に位置付ける作業のひとつとして、複数の地域間で構築される社会空間に注目する研究がなされている。これは出身地との頻繁な移動や連絡といった、連続的な関係も視野に入れて捉えるものであり、移民のトランスナショナルな性格に注目する研究姿勢である。グリックシラーとパーシュはこのような状態を捉えるために、トランスマイグラント（transmigrant）という表現を用い、移民をその居住国内部の脈絡でのみ捉えるのではなく、複数の地域の関係の中に位置付ける必要性を提唱している（Glick Schiller and Basch 1995）。こうした姿勢は、移民母村と移民先という二点間の関係だけではなく、ある地域から複数の地域へと移出していった人々の関係や、ある地域へ移住した後に再び別の地域へと再移住する人々の存在といった、複数の地点間関係に注目するものである。

上述のような研究はいわば、移民を移民母村や移住先という地域の中でのみ捉える立場ではなく、そうした地域を横断する人の移動や情報の交換等の各種の紐帯や活動領域に注目する立場をとっている。これに関してファイストは、移民によって生じるトランスナショナルな社会空間に注目し、近年の研究の多くが、家族や経済、社会、宗教、文化、政治といった多様な関係を維持することによる、国境を横断する紐帯を



研究対象とする傾向があることを指摘している (Faist 2000: 12-13)。こうした研究は、特に移民母村と移民先との相互の社会的な関係や紐帯を強調する性格を持つといえるだろう。以上の問題意識に基づき、ファイストは頻繁な移動は移民の出身地と移住先という二分法を曖昧にすると述べる。グリックシラーとバーシュやファイストらが指摘するように、トランスマイグラントのような出身地と移住先という二分法を無化させるような頻繁な移動を研究対象とする際には、移民先あるいは移民母村という特定の地域内部に拘泥するのではなく、トランスナショナルな社会空間に注目するアプローチが有効である。

ただし、こうした研究にも問題点は存在する。なぜならば、移民の生活世界の空間的な広がりに着目する一方で、移民の定住する側面を十分に考慮されない恐れが存在するからである。移民母村と移住先との間の密接な関係や、二つの地域間の頻繁な往復といった現象は、移民を居住国内部で定住するという一面的な見方から、複数の地域を視野に入れた、より広範囲に渡る見方を獲得する上で必要なものである。しかしファイストが述べるようなトランスナショナルな社会空間に注目する視点は、国境を超えた移動という現象を過度に強調してしまい、実際に居住している地域における具体的な社会状況を軽視してしまう恐れがある。グローバル化の進行が必ずしも国家の役割を縮小させるのではないことはしばしば指摘されるが、同様に、トランスナショナルな移民の活動によって、移民の移民先での居住が意味を失うわけではない。むしろ実際の研究では、移住先での居住や、離れて暮らす移民母村の住民との関係により、トランスナショナルな活動がどのような影響を受け、個々の移民にとってどのような意義を持つのか、そして当事者にとって、実際に居住している地域や出身地がどのような意味を持っているのかといった、日常的な生活の実態に注目する必要がある<sup>6)</sup>。こうした研究を行うためには、個別の移民社会の時間的、空間的な個別性を実証的に追う作業が必要となる<sup>7)</sup>。そのためには、移民のトランスナショナルな社会空間を、個別地域の歴史的、地理的、社会的な脈絡の中に位置付けて実証的に把握する作業が必要とされる。このような視野に立った移民の文化人類学的研究を行うためには、研究対象となる地域や社会を取り巻く地域社会や国家、世界システムといったマクロな背景を視野に入れながらも、ミクロなレベルでの移民の具体的な経験を対象とした分析する作業が必要とされる。いわば研究の視点を特定の地域に置きながらも、様々なレベルにまたがる複数の場を視野に入れた研究が求められるのである (Brettell 2003: 7)。

文化人類学におけるトランスナショナリズム研究が果たした意味として、従来の移



民研究が比較的軽視してきた、移民先と出身国との間の頻繁な移動や、固定的なコミュニティを超えたネットワークの構築、移住経験がアイデンティティに与える影響等を重要な問題として提起した点があげられる。例えば上杉は、移民の多元的帰属意識や多元的ネットワークに関する研究は、トランスナショナリズムを対象とした諸研究の中でも立ち遅れている分野であるとともに、文化人類学的なトランスナショナリズム研究が特に焦点を当てることで、他分野の研究を補い、多大な貢献が期待できると指摘している（上杉2004:27）。このような文化人類学的なトランスナショナリズム研究に加え、移民が実際に生活する場所、およびその出身地や目的地といった、具体的な地域が、移民の生活世界で占める意味を対象とした研究も必要とされるであろう。ヴェルトヴェックはトランスナショナリズム研究の方向性の一つとして、「場所や地域性の（再）構築」を挙げているが（Vertovec 1999: 455-456）、特定の地域が移民の生活世界の中でどのような意味を持っているのか、そして移住経験の中で、それぞれの地域に付与される意味合いがどのように変化しているのかを知ることは、移民のトランスナショナルな生活を理解する上で重要なテーマになると思われる。

以上の問題意識に基づき、本稿は移動する人々の生活世界の中で、現住地や出身地がどのような意味を持ち、また当事者がどのように意味付けて来ているのかという問題に注目する。そしてこのような研究枠組みを採用することにより、華人系移民の生活世界の空間的な広がり、具体的な居住地域での経験の特徴を捉えることを試みる。そのために、華人の移住の過程で、移民母村、移民先、更なる移民先、という複数の地域が、それぞれ華人にとってどのような意味を持つようになったのかを検討することとする。それにより、連続的な移住と定住の過程と、複数の地域を横断する移住とネットワークの諸相を把握することを試みる<sup>8)</sup>。いわば研究対象とする場所を、均質的な空間として捉えるのではなく、様々なレベルでの複数の地域との相互関係として捉える視点である。

### 3 華人社会と移民母村

華人の移民母村と移民社会との関係については、従来、僑郷（華僑の故郷）と海外の華人社会との相互関係が注目されてきた。こうした研究の多くは、移民や送金、投資といった両者の相互交流が、僑郷に与える影響に注目する傾向がある。例えば僑郷と華人社会の関係について先駆的な研究を行った陳達は、南洋への移民と僑郷の社会変化に注目した。陳は移民送出村落と非移民送出村落を比較し、移民の送金によって

僑郷が近代化したことを指摘した（陳 1939）。これに対し、香港の新界地域の農村からロンドンへ移民した人々に注目したワトソンは、英連邦のパスポートを所有する植民地香港の住民が宗主国イギリスを移民先として選択した点や、宗族が移住のためのエージェントとなった点を指摘した。特にワトソンは、移民の経済援助が、逆説的に移民母村の伝統保持や伝統復興に寄与したことに注目した（Watson 1977; ワトソン 1995）。両者の出した結論は近代化と伝統復興という、一見相反する方向性をもたらしたようにも見受けられる。だが伝統復興とは近代化の一側面であることを考慮すれば、両者は僑郷と華人社会との関係によって生じた変化の、異なる側面に注目しただけであるといえるだろう<sup>9)</sup>。

ワトソンの研究で興味深いのは、英領植民地であるという文化的・社会的背景が、ロンドンへの香港人移民の移住形態に与えた影響である。彼は調査した時点で英領植民地であった香港という地域と、新界地域の農村の地理的、社会的特徴が、宗主国イギリスへの新界農民の移民に際し、どのような役割を果たしていたのか、さらに移動する主体である香港の農民がそうした条件をどのように活用したかを詳細に報告している。これはいわば、移民を取り巻く所与の状況という側面と、そうした状況に主体的に取り組む戦略的な側面の両方に注目する研究である。こうしたワトソンの視点は、他地域の華人の国際移動を研究する際にも示唆に富むものである。

このように僑郷と華人社会との社会関係に関する研究は、陳やワトソンの研究に見られるように、海外の華人社会が僑郷の地域的特徴をいかに反映しているのかといった観点や、その逆に海外の華人社会からもたらされる、人的、物的、経済的影響や知識や情報等が、僑郷にいかなる影響を与え、社会的な変容をもたらすのかといった、相互のネットワークを重視する傾向がある。また近年の特徴として、華人の出身地である僑郷の社会的特徴そのものに注目した多様な分野にまたがる研究が存在することが挙げられる<sup>10)</sup>。例えば僑郷を単なる移民の出身地という枠組みの中でのみ捉えるのではなく、移民母村の側から見た移民要因や各種のネットワークを対象とした研究（e.g. 山下 1990; 2002; 可児 1996）、華僑華人による投資活動と僑郷との関係を対象とした研究（e.g. 山岸 2005）、僑郷の歴史的背景や地域的特徴を対象とした研究（e.g. 庄 2000; 周・柯 2003）、僑郷が持つ社会資本が華人との関係でどのような役割を果たすのかといった研究（e.g. Douw, Huang and Godley 1999; 李 2005b）、僑郷がトランスナショナルなレベルでの華人同士の関係やアイデンティティの中で果たす意味に関する研究（e.g. Kuah 2000）等、僑郷を対象とした研究は多様化しつつある。

このような僑郷と華人社会との関係に注目する研究は、単一の地域内部の脈絡の中

でのみ華人社会を捉えるという固定的な研究姿勢をとるのではなく、複数の地域間の関係性の中に華人社会を位置付ける部分に特徴がある。その意味で、僑郷と華人社会を対象とした研究は、特定のコミュニティを単一の場所の中でのみ限定して捉えるのではなく、出身地と移住先という二地域間の関係や、トランスナショナルな社会空間に注目するという長所がある。

しかし連続的な移動と定住の過程に注目する立場をとる場合、中国と海外の華人社会という二点間にのみ注目する枠組みでは不十分である。僑郷と華人社会とを視野に入れた研究も、そこから華僑華人が移住していった、という一方向的な移動の過程にのみ注目する姿勢をとるとすれば、それは一面的な見方を持つことになる。近年の華人の国際移動を特徴付けるのが、現地国籍を取得した後に再び別の国家に再移住する再移民や、かつての華僑とは異なり高所得者や高学歴者を多く含む新移民のように、必ずしも永住を志向せず、頻繁な移動を繰り返し、華僑と華人との静態的な区分を相対化させる人々の存在である (Ong and Nonini 1997; 王 1999; 2001; 宮原 2002)。僑郷に関する研究も、こうした華人の国際移動の流れを視野に入れる必要がある<sup>11)</sup>。

このように僑郷と華人社会の関係を二点間の一過性の移動として捉えるのではなく、複数の方向性を持つ、連続的な移動の中で捉える姿勢は、華人にとっての移民母村のありかたの変化に注目する視点を提供する。この問題を考察するために、オックスフェルドが調査した、インドのカルカッタの華人のカナダへの移住を見てみたい (Oxfeld 1993; 1998)。カルカッタ華人の中には中国からインドへと移住して数世代を経た後に、再びカナダへと移住する者が存在する。カナダにも華人社会が存在するが、広東出身者や香港出身者が多数派を占めるカナダ華人に対し、カルカッタ華人は客家、広東、湖南出身者から構成され、さらにインドでの生活経験もカナダでの生活とは異なっている。そのためカナダに移住したカルカッタ華人は、必ずしも自己をカナダ華人社会と同一化するとは限らず、むしろインド出身という自分たちの背景が明確になる場合がある (Oxfeld 1993: 267-268)。さらにこれらのカルカッタ華人はかつての居住地であるカルカッタと再移住先であるカナダとの間を頻繁に往復し、両地域を結ぶネットワークを形成している。このような状態は、かつての居住地カルカッタが移民母村としての位置づけにあることをうかがわせる (Oxfeld 1993: 265)。

オックスフェルドが報告する事例からもうかがえるように、華人の移住者にとっての移民母村は、必ずしも中国の僑郷だけであるとは限らない。移民第一世代と移民母村との関係と、居住地で定住化、現地化する世代にとっての関係とは、自ずと異なる性格を持つ。華人が確固とした民族のカテゴリーではなく、地理的、歴史的な偏差を

内包する存在である以上、世代ごとや居住地ごとに、僑郷との関係も多様化することとなる。これに関し、ルイは、広東省で行われた海外の華人青年を対象とした祭典に参加したアメリカ華人の経験を対象とした研究をおこなった (Louie 2000b; 2004)。祭典への参加は、中国人としてのアイデンティティを強化するよりも、むしろ逆に、アメリカ華人が自己をアジア系アメリカ人として再認識する契機になった (Louie 2004: 30, 169)。いわば訪中経験が逆説的に自他の差異を明確に意識化させたのである。また彼女はアメリカ在住の華人が中国の僑郷を訪問する際には、直接中国からアメリカに渡航した世代や、そうした一世の子供、現地生まれの世代といった、様々な世代により、中国との関係や中国を訪問する意味が異なっていることを指摘する (Louie 2004: 46-47)。ルイの事例からは、かつての移民送出地域であった中国が必ずしも移民母村としての意味を持ち続けるとは限らず、華人にとっての僑郷の意味も世代によって異なることを明らかにしている<sup>12)</sup>。

このような移民社会と移民母村との関係の変化は、移民社会にとってだけでなく、移民母村において重要な意味を持っている。オックスフェルドは広東省の客家村落でのフィールドワークに基づき、帰郷する移民と村落の住民との関係を検討している。オックスフェルドが調査した村落はインドや東南アジア、台湾に移民を送出してきた典型的な僑郷であり、現在でもそれらの海外在住者が自己あるいは祖先の出身村落を訪れている。彼女の調査村では全世帯の約 14%が何らかの形で海外の華人と関係を持っているが、そうした世帯だけでなく、村落の学校やインフラストラクチャーの建設のために海外華人からの援助や投資活動が存在するため、村落社会全体に対して重要な役割をはたしている。しかしこうした村人にとって海外在住者は、単なる自己の村落出身の海外在住者という存在にあるだけではない。彼女は、村人にとって、村落を訪問する海外の華人とは、単なる自己の親族や同郷者としてだけでなく、経済的な恩恵をもたらす者として、さらには外国人として多様な位置づけにあることを報告している (Oxfeld 2004: 103)。彼女の報告する事例からは、移民社会と移民母村は、それぞれのコミュニティ内部のみならず、両者の関係性自体が変化することに注意する必要性を喚起する。このような事例からは、移民母村と移民社会との関係を固定的にとらえず、むしろ複数回にわたる移動や、拡散して居住する家族や親族、地縁集団や民族集団同士の関係の中で変化するものとして捉える必要があることが明らかになる<sup>13)</sup>。

実際に、華人が自己の居住地から別の地域へと移動して生活する場合、現実的な故郷は中国というよりも、自己が生まれ育った地域になると思われる。特に現地生まれ

の世代にとっては、中国は祖先の出身地であり、自己の文化的・民族的アイデンティティの対象として重要性を持つ一方で、現実的な故郷は中国ではなく、実際に生まれ育った地となるであろう。移民社会が移民母村の単純な延長ではないということはしばしば指摘される。それぞれの地域や世代により、それぞれの移民やその子孫の文化的、社会的背景も異なるため、当事者ごとに移民母村の意味も異なることとなる。移民母村と移民社会の関係も、世代や地域差、個人差を反映し、様々なスタイルで構築されるのだといえよう<sup>14)</sup>。

こうした移民母村と移民社会との関係を連続的な移動と定住の過程の中で捉える姿勢は、華人社会と僑郷との関係を二点間の関係として捉えるだけではなく、連続した移動が複数の移民母村を生み出す可能性に注目する必要があることを意味する。いわば、かつては移民先であった地域も、そこから再移住する人々が存在することにより、新たに移民母村としての性格を獲得する可能性があるのである<sup>15)</sup>。

上述のような問題意識に基づき、本稿の以下の部分では、移住して来る華人と移住して行く華人の二つが存在するパプアニューギニアを対象とする。それにより、上述した華人の連続的で多方向的な移住経験が、その移民母村に与える影響の特徴について考察することとする。

#### 4 ニューギニ・チャイニーズ

パプアニューギニアにはニューギニア島がドイツやイギリス、オーストラリアによって植民地化されてきた時代から華人が居住してきたという歴史がある。これに加え、近年は中国以外にも、マレーシアやシンガポール、インドネシア、台湾、香港といった東・東南アジアのさまざまな地域から華人ニューカマーが流入してきている<sup>16)</sup>。そのため、現在のパプアニューギニアの華人社会は植民地期から居住してきた華人オールドカマーと、独立以降流入してきた華人ニューカマーから構成されている<sup>17)</sup>。

ニューギニアにおける華人の移住はこの植民地期に始まった。初期の華人はドイツ領植民地の労働力として、ニューギニア島北東部やビスマルク諸島各地に移住して来た (Biskup 1970; Firth 1989; Moore 1990)。これらの華人はラバウルやココポといったニューブリテン島の都市、ケビエンやナマタナイといったニューアイルランド島の都市、レイマダンといったニューギニア本島北岸の都市やその周辺地域に流入し居住するようになった。特にドイツ領ニューギニアの首都であったラバウルにはチャイナタウンも形成され、ニューギニアにおける華人コミュニティの中心地となった。

ドイツ領ニューギニアは1914年の第一次世界大戦の勃発とともにオーストラリア軍によって接収された。その後、1920年からは国際連盟委任統治領としてオーストラリアの統治下に置かれた<sup>18)</sup>。第二次世界大戦後、オーストラリアはニューギニアの華人が自国の国籍を取得することを許可したため、大多数の華人がオーストラリア国籍を獲得した。さらに1975年のパプアニューギニアの独立前後から、これらオーストラリア国籍を取得した現地の華人の中には、オーストラリアへと移住する者が増加するようになった(Wu 1998: 213)。

植民地期から居住する華人がオーストラリアに流出する一方、1980年代以降は前述のように東・東南アジア諸国から新たに華人が入り込んでくることとなった。これら華人ニューカマーの到来は、植民地時代とは異なる様相を呈している。植民地期の華人は広東省の四邑地域出身者や客家が中心であったのに対し、近年の華人ニューカマーの中にはマレーシアやインドネシア等の東南アジア出身者や、広東省以外の中国各地の出身者が含まれている(Inglist 1997; 市川 2004)。華人ニューカマーのパプアニューギニアへの流入形態も植民地時代とは異なるようになった。植民地時代にニューギニアに到来した華人は、先行する親族や同郷者を頼った連鎖移民を行っていた。これに対し、近年の華人ニューカマーは必ずしも華人オールドカマーと直接的な血縁関係や地縁関係を保持していない。またそれぞれの華人は使用する言語や信仰する宗教等が異なるため、必ずしも相互に意思疎通をするのは容易ではない。複数の地域出身の華人ニューカマーの存在は、現在のパプアニューギニアにおける華人社会の内部構成を複雑化させることとなったのである。

本稿ではこうした下位集団の中でも、特にニューギニア島が植民地化される過程で流入し、コミュニティを形成してきた華人オールドカマーを対象として選択することとする。ここで本稿が対象とする人々の呼称法について述べておきたい。「華人オールドカマー」という用語は、パプアニューギニア独立以降に流入してきた「華人ニューカマー」と対比した上での呼称法であり、当事者たちはこの言葉を使用していない。また「華人」という語も華人オールドカマー達の自称としては用いられていない。パプアニューギニアにおける華人オールドカマーの自称はいくつかある。広東語による自称としては「唐人」(*tong yan*)や「新幾内亜唐人」(*san gai roi a tong yan*)といったものがあり、英語では単にChineseと述べるか、Niugini Chinese<sup>19)</sup>、PNG Chinese, Local Chinese等と表現される。本稿の以下の部分では、文脈に応じ、中国系移民の総称としての「華人」という語と、華人オールドカマーの自称として一般的に使用されることが多い、「ニューギニ・チャイニーズ(Niugini Chinese)」という呼



称法を併用することとする。またパプアニューギニアにおいては植民地期からラバウルが華人社会の中心地としての性格を持っていた。そのため本稿でもラバウルにおける華人社会について中心的に論じることとする。

## 5 ニューギニ・チャイニーズと中国

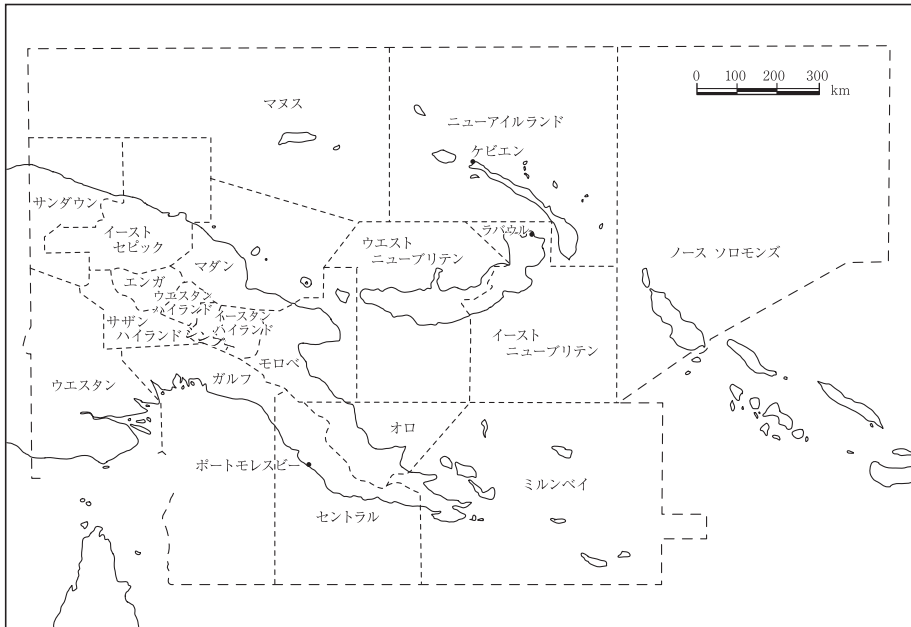
### 5.1 第二次世界大戦以前の中国との関係

先ずニューギニ・チャイニーズにとっての中国との関係について検討してみたい。ニューギニア島への華人の移住は19世紀末から本格化した。この時代はニューギニア島に限らず、多くの地域への華人の移住が本格化した時代でもあった。ニューギニ・チャイニーズは広東省の珠江デルタ地帯に位置する、開平県、台山県、新会県、恩平県からなる四邑地域<sup>20)</sup>の出身者とその子孫が大多数を占める。四邑地域はニューギニア島のみならず、東南アジアや北米の様々な国家や地域に多くの人々を送り出した代表的な僑郷である。

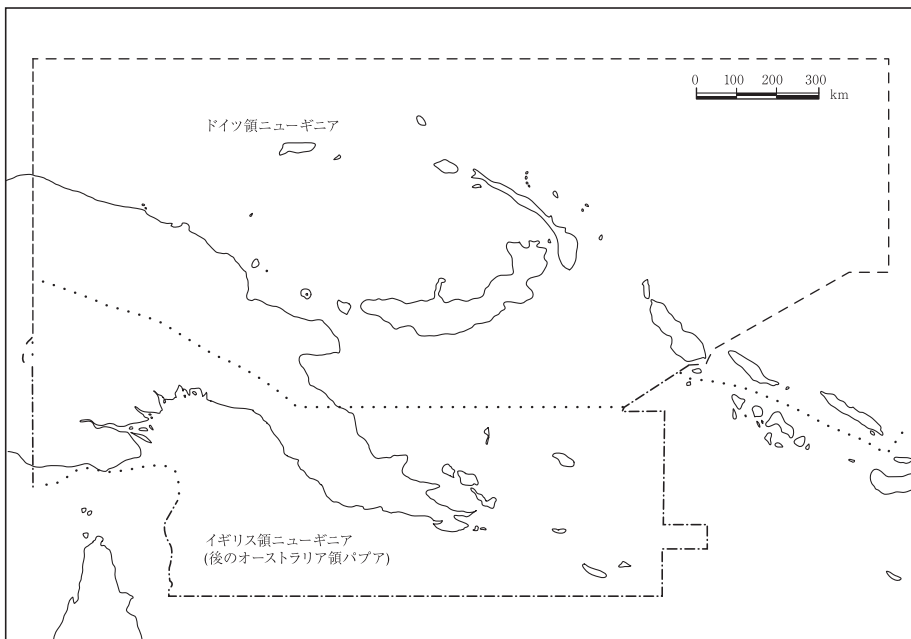
四邑地域をはじめ、広東省からは比較的長期にわたって移民が誕生してきた。四邑地域からの海外移民は明代から存在したが、本格的に大量の移民を送出するようになったのはアヘン戦争(1840年)以後であるとされる。19世紀以降、広東省を含め中国の人口は急速に増加し<sup>21)</sup>、各地で土地不足が生じた<sup>22)</sup>。その結果、離農して都市部に流入し、小規模な商業等の職業に従事する人々が増加した(梅・張主編 2001: 29-30)。人口増加による人口圧の高さと、それを吸収するだけの農地の不足は、広東省や福建省から多くの移民が誕生した理由としてしばしば指摘される。また広東省は山地が多く耕作に適する土地が限られていた点、古くから海外との貿易が行なわれていた点、アヘン戦争や太平天国の乱といった国内の戦乱による被害、契約労働者のブローカーの存在などの様々な理由により、広東省の住民の中には、国外、特に西洋の植民地での労働力需要に応じる形で、移民労働者となり生計を立てる者が増加することとなった(広東省地方史志編纂委員会 1996: 139; 新会県地方志編纂委員会編 1995: 1094; 梅・張主編 2001: 29-34)<sup>23)</sup>。

このようにして、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、四邑地域からは多くの中国人が海外に移出して行った<sup>24)</sup>。四邑地域出身の中国人は主に東南アジアやアメリカ合衆国やカナダ、オーストラリアといった地域に移住して行き、これらの地域にもコミュニティを形成した<sup>25)</sup>。





地図1 パプアニューギニア地図



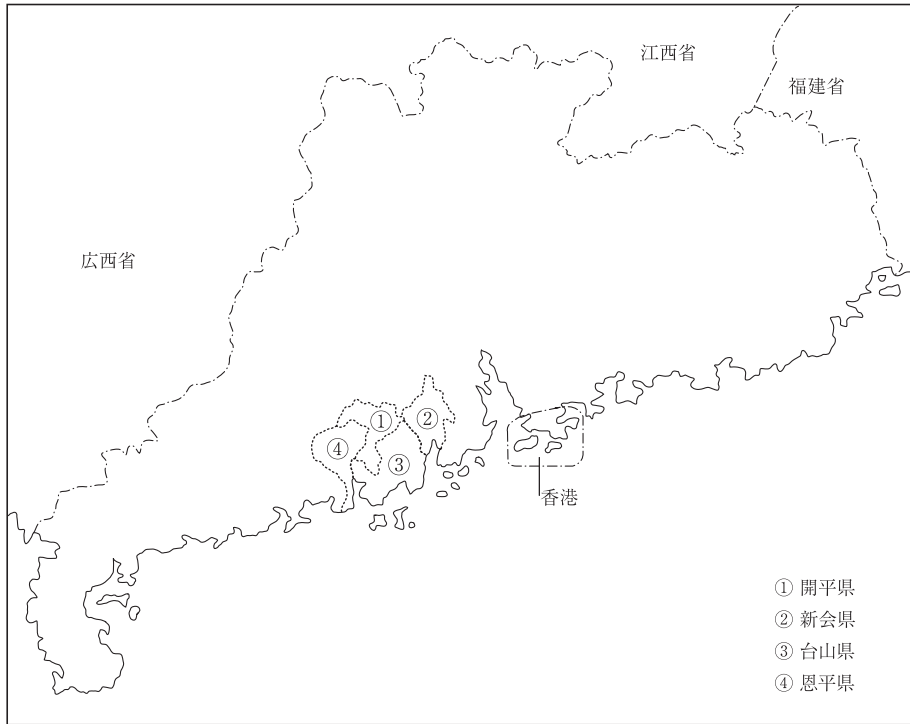
地図2 植民地期のニューギニア地図



地図3 ラバウル周辺地図

19世紀末から20世紀前半の時期に国外へと移住して行った四邑地域出身者の中にはニューギニア島を訪れた者も含まれていた。当時の華人の多くは、始めはプランテーション等の植民地労働力としてニューギニアに到来していた。契約期間が終わると、植民者のために働くのをやめ、自ら得た資金をもとに自分自身で経済活動を開始するようになる。また中国との関係は経済的なものに限られていたわけではなかった。他地域の華人社会と同様、この時期のニューギニアでは中国から配偶者呼び寄せ、故郷に送金や寄付を行うことによって僑郷との関係を維持し続けていたのである。

一般的に海外に移住する華人は先行して移住した親族や同郷者を頼ることが多いが、ニューギニアに渡航した華人の場合でも、先に渡航して生計を立てていた親族を頼り、中国からニューギニアに到来することが多かった。華人に限らず、人の移動は一過性で一方的なもので終わるとは限らないが、この時期の華人は初めからニュー



地図4 広東省の僑郷の地図

ギニアに移住することを意図していたわけではなく、様々な要因により結果的にニューギニアに移住することとなった。華人は新たな居住地であるニューギニアで定着的なコミュニティを形成しながらも、僑郷との関係は維持し続けてきた。

この中国との関係は、特に華人の子供の教育という面に顕著に現れている。ここで植民地時代の華人の教育について事例を挙げることによりみてみよう。

#### 事例1：中国における子供の教育

この事例で述べるのは、調査時にニューブリテン島の都市であるココボに在住していた50代の女性の父親の話である。彼女の父親は華人男性と現地住民女性の間生まれ、彼女の祖父は中国からラバウルに移住し、現地の女性と結婚した。彼はラバウルで生まれ、1925年から1927年まで中国に送られて教育を受けた。中国では中国語や書、武術などを学んでいたらしい。中国にいた時には、彼は混血であり、色黒であったため他の中国人の子供からいじめられた。だが彼はそれに負けずいつも喧嘩をしていたとのことである。彼は中国からラバウルに帰って

くると家具を作る仕事を始めた。中国で宗教に関する知識も学んできたため、チャイナタウンや華人墓地で祖先祭祀を執り行うこともあった。彼は書にも優れていたため、他の華人のために詩を書くこともあったし、子供たちに武術を教えることもあったとのことである。

この事例の男性はニューギニア生まれであり、かつ母親はニューギニア人であるが、中国で二年間教育を受け、その後ニューギニアに戻り生活を続けた。彼が中国で得た教育は彼自身のための知識であるとともに、ラバウルに居住していた他の華人にとっても必要な知識であったと推察できる。彼は自分が得た中国語の読み書きや宗教や武術等に関わる知識や技術をニューギニアの移民社会にもたらし、いわゆる「中国文化」を保持する役割を果たしていたことが窺える。いわば中国での教育はニューギニアにおける華人のエスニシティを維持する役割を果たしていたといえるだろう。ただし、こうした「中国文化」は、中国での教育が行なわれなくなった現在では次第に希薄化していつている。この問題については後述する。

植民地期のニューギニアの華人と中国、特に出身村落との関係の特徴は、以下の五点にまとめることができる。第一点目は、ニューギニアの華人にとって、中国は自己あるいは父母、祖父母の直接の出身地であり、そのため中国や出身村落についての経験や知識が直接的であったという点である。第二点目は、そのため中国の村落に居住する親族や同郷者等の人々との関係も直接的であり、キョウダイや配偶者、親や子供といった親族や姻族の呼び寄せ、あるいは一旦ニューギニアに渡航した者の中国への帰還といった、相互の人的交流も行なわれていたことである。第三点目は、ニューギニアで生まれた子供の中には、「純血」か「混血」かの区別なく、中国や香港で高等教育を受けた者がおり、そうした教育活動はニューギニアに居住する人々が「中国文化」を維持し再生産することを助けていたことである。第四点目は、このような移住や帰郷といった人の移動以外にも、送金や国民党支部の設立といったような中国との関係も存在していたことである。第五点目は今まであげたような関係により、ニューギニアに居住する華人は中国の僑郷との文化的・社会的な関係を維持し続け、「中国国外の中国人移民社会」としての性格を持っていたということである。

植民地期、特に第二次世界大戦以前のニューギニアの華人にとって、中国は直接的なリアリティを持った存在であった。植民地期には中国で生まれ育ったいわゆる一世も多く、中国や香港での生活経験やそれらの地域に関する知識は実体験に基づくものであった。その意味で、この時期のニューギニアの華人社会はまさにニューギニアに

における中国人移民のコミュニティであり、中国、特に本人たちやその父母の出身村落は、移民母村そのものであった。

## 5.2 第二次世界大戦後の中国との関係

中国とニューギニアの華人社会との関係は、第二次世界大戦後、大幅に変化することとなった。太平洋戦争とそれに続くニューギニアの一部の地域での日本軍政により、ニューギニアの華人は中国や香港との交流や連絡が不可能になった。1937年の日中戦争の勃発により、中国大陸では戦乱が続き、ニューギニア・チャイニーズの僑郷がある広東省も戦争の被害を受けることとなった。日本との戦争が激化するにつれ、戦禍を避けニューギニアに渡る華人が増加した。しかし、1942年に日本軍によりラバウルを中心とするニューギニアの一部が攻撃され占領されると、華人の活動は制限されるようになった。日本軍政は1942年から1945年まで続いたが、この間は中国とニューギニアとの間の航路も存在せず、華人は中国の親族との連絡を取ることができなかった。中国の移民母村とニューギニアの移民社会との関係は一時的に断絶することとなった<sup>26)</sup>。

中国との断絶は戦後もかたちを変えて継続した。第二次世界大戦後も続いた国共内戦や中華人民共和国の成立により、中国大陸では政治的・社会的な混乱が続いたためである。この時期、戦前に中国や香港に取り残されたニューギニア・チャイニーズの配偶者や子供の中には、戦後、香港経由でニューギニアに到来した者も存在する。だが中華人民共和国の建国とともに、中国人（中華人民共和国国民）がニューギニアへ移住することは困難になり、ニューギニアの華人が子供を中国に送って高等教育を受けさせることも事実上不可能になった。この時期、ニューギニアに居住していた華人はオーストラリア保護民（Australian Protected Person）という身分であった。オーストラリア政府は1972年まで中華人民共和国政府と外交関係を結んでおらず、両国の中国人（華人）が自由に訪問や旅行をすることは困難であった。国民党は国共内戦後、台湾に本拠地を移したが、広東省出身者とその子孫であるニューギニアの華人は、閩南語や北京語が使用される台湾の中国人社会とのつながりを持っていなかった<sup>27)</sup>。

第二次世界大戦後の国際的な政治状況の変化は、華人と中国との関係を変容させただけでなく、ニューギニアの華人社会の性格そのものも変容させた。訪中が困難になることにより、中国の移民母村と連動した社会生活を送ることも困難になった。新規移民の激減や現地生まれの華人の増加は中国での生活経験を持つ者や、中国の移民母村に関する直接的な知識を持つ者の減少を意味した。そのような状況の中でも中国

や香港との関係は完全に消滅したわけではなく、ビジネス上の取引や僑郷の親族との連絡も依然として香港経由で行なわれていた。例えばラバウルの国民党は台湾や香港経由で中国語新聞や中国語の図書、映画等を提供していた<sup>28)</sup>。だが戦前のような移民母村との直接的で対面的な関係は次第に減少していった。戦後のニューギニアの華人は世代を追うごとに実際の中国に関する知識や体験が薄れ、本土に居住する中国人と接触する機会も少なくなっていたのである。

### 5.3 パプアニューギニア独立後の中国との関係

中国や僑郷との関係は、パプアニューギニア独立以後もそれほど変化しなかった。オーストラリア政府は1972年に中華人民共和国と正式に外交関係を結んだが、中国を訪れるニューギニアの華人は少なかった<sup>29)</sup>。

ただし1975年のパプアニューギニアの独立以後、それまでの僑郷との接触とは異なるかたちでの中国人（華人）との接触が見られるようになった。それが1980年代以降増加した、東・東南アジア諸国出身の華人ニューカマーとの接触である。ニューギニ・チャイニーズは、独立以前から東南アジアの華人社会と種々の関係を取り結んでいた。ドイツ領植民地期には、シンガポールやスマトラといった東南アジアの他の国の植民地を経由して流入した華人が存在した。また戦後、中国との直接的な交流が困難になった時期には、香港やシンガポール、マレーシアの華人社会とビジネス関係を維持していた。ただし近年の華人ニューカマーの多くは、ニューギニ・チャイニーズと直接的な関係を保持してはいない。これらの華人ニューカマーは、かつてとは別のルートを辿ってパプアニューギニアに到来したのである。近年到来する中国大陸出身者が、必ずしも四邑地域や惠安地域の出身者というわけではなく、むしろ、北京や上海、福建といった中国の他の地域の出身者が多数存在することは、こうした事情を如実に物語る。

中華人民共和国出身者の中には様々な地域出身者が含まれるが、おおむね普通話（北京語）が使用されている。マレーシアやシンガポール等の東南アジア華人の中には広東語や客家語話者が存在するため、大多数の中華人民共和国と比較し、ニューギニ・チャイニーズとのコミュニケーション上の問題は少ない。ただし、こうした中国や香港、東南アジア等の華人ニューカマーの話す広東語や客家語も、必ずしもニューギニ・チャイニーズの話す広東語や客家語と同じというわけではない。そのため相互に中国語での会話が成り立たない場合は、華人同士でも英語を用いて相互に意思疎通することになる。華人同士での会話以外にも、パプアニューギニア人やオーストラリ

ア人を始めとする外国人とのコミュニケーションするには、英語かあるいはメラネシア・ピジンを話す必要がある<sup>30)</sup>。東南アジアや香港の出身者は自国でも英語に接する機会が多いため、比較的容易に英語でのコミュニケーションをとることが可能である。だが中華人民共和国出身者の中には、中国にいた時にはほとんど英語を話す機会がなく、パプアニューギニアに到来してから本格的に英語やメラネシア・ピジンを学ぶ者がいる。華人あるいは中国人という共通したエスニシティとは裏腹に、相互に使用する言語の差により、華人同士でもコミュニケーションの障害が存在するようになったのである。

このように、現在のニューギニ・チャイニーズと華人ニューカマーとの関係は、以前の中国の僑郷との関係とは異なる性格を持つようになった。かつての僑郷とニューギニ・チャイニーズとの関係は、ホームランドと移民社会との関係であり、華人コミュニティは中国の村落から別れ出た飛び地のような性格が強かった。だが独立以後の華人ニューカマーとの関係は、別々の地域の華人同士の接触という性格が強くなり、移民母村と移民先という関係ではない。これは中国とニューギニ・チャイニーズとの関係が、かつての二点間の関係ではなく、多点間の関係になったことを意味する。

中国の僑郷とニューギニ・チャイニーズの関係もかつての出身地と移民先という関係から変化してきた。改革開放政策以降、ニューギニ・チャイニーズも中国を訪れることが容易になった。だがそれ以降も、訪中したニューギニ・チャイニーズのすべてが中国に対して愛着を感じるわけではなかった。また訪中した場合でも、広東省の僑郷を訪れず、北京や西安、桂林等の観光地を訪れる者も存在する。いわば、祖先のルーツの確認のためだけでなく、観光旅行の一環として訪中がなされているのである。

第二次世界大戦後のニューギニ・チャイニーズと中国との関係は、以下の三点にまとめることが出来る。第一点目は、パプアニューギニアにおける現地生まれの世代の増加により、中国、特に僑郷に対する関係が疎遠になったことである。第二点目は、新規移民の減少により、僑郷との社会関係の維持が困難になったことである。これは中国やオーストラリアの政治状況に起因している。第三点目は、これによりニューギニア国内で「中国文化」の維持や再生産することが次第に困難になったことである。ニューギニ・チャイニーズの大多数は在地のニューギニア人社会に同化して行くことはなかったが、同時に「中国文化」を保持した、「中国人」の集団でもなくなっていった。



## 6 ニューギニ・チャイニーズとオーストラリア

### 6.1 パプアニューギニア独立以前のオーストラリアとの関係

白豪主義政策がとられていた時代、ニューギニ・チャイニーズはオーストラリアへと移住することができなかった。宗主国であるオーストラリアの政策や植民地官僚は様々な側面から華人の生活に影響を与えており、キリスト教団体の関係者はニューギニ・チャイニーズと個人的な関係を保持していた。しかしオーストラリアという国土自体は、ニューギニ・チャイニーズにとっては直接体験することの出来ない空間であった<sup>31)</sup>。

このオーストラリアとの関係が変化したのも、やはり第二次世界大戦後であった。戦後の華人とオーストラリアとの関係を劇的に変えたのが、オーストラリアでの教育の開始である。現在のニューギニ・チャイニーズが、この時期にオーストラリアで子供の教育を受けさせた理由としてしばしば挙げるのが、ニューギニアには高等教育機関が存在しないことと、英語を学ばせるためにはニューギニアよりもオーストラリアで教育を受ける必要があることである。すでにニューギニアでの初等教育は英語で行なわれていた。ラバウルには戦前から華僑学校と養正学校という華人の学校が存在し、キリスト教伝道団によって援助されていた。これらの学校にはオーストラリア人の教師も所属し、ニューギニ・チャイニーズの子供を教育した。そのためこうした学校に通う華人の子供は、ニューギニアに居住している時期から英語やオーストラリア式の教育に慣れ親しむこととなった。ニューギニア地域の現地住民によって共通語として使用されていたメラネシア・ピジンは、ニューギニアの現地住民と会話をする際に必要であり、ほとんどの華人が日常生活の中で習得していた。だが植民地の支配層であるオーストラリア人と会話をする際には、ピジンではなく英語を話す必要がある。オーストラリア植民地の中で社会的な上昇を遂げるためにも、ニューギニ・チャイニーズは英語を習得し上達させる必要があった。

オーストラリアでの生活は、ニューギニ・チャイニーズにオーストラリア的な生活様式を身に付けさせ、直接的な経験によりオーストラリア社会を身近に感じさせることとなった。ただし植民地期には大部分の者がオーストラリアでの教育を終えるとニューギニアに戻って生活した。卒業後もオーストラリアに留まり、さらに進学したり就職したりするニューギニ・チャイニーズも存在したが、そうした者は少数派で

あった。植民地時代には、オーストラリアでの生活はあくまでも教育を受けるための一時的なものであった。さらにニューギニ・チャイニーズとオーストラリアとの関係を決定的に変化させたのが、オーストラリア国籍の取得である。1950年代後半からオーストラリア政府は従来の白豪主義政策を変化させ、自国へのイギリス系以外の移民を積極的に奨励するようになった。こうした潮流の中で、ニューギニアに居住する華人もオーストラリア国籍の取得が可能になったのである。

オーストラリア国籍の取得は、ニューギニ・チャイニーズのコミュニティと外部社会との関係をドラスティックに変化させた。それまでのニューギニアの華人社会も、ニューギニア地域内部でのみ完結した存在ではなかった。移民母村である中国との人的・物的な交流があり、ある程度中国と連動した特徴を持つ社会であった。しかし第二次世界大戦後から中華人民共和国の成立、オーストラリア国籍の取得といった経緯により、中国よりも、むしろオーストラリアとの関係のほうがより重要になっていったのである。

## 6.2 独立前後のオーストラリアとの関係

このオーストラリアとの関係をさらに深化させたのが、パプアニューギニアの独立である。1975年のパプアニューギニアの独立とともに、ニューギニ・チャイニーズは新たな独立国の中の外国籍者という立場に置かれることとなった。だがこの場合の外国籍とは、中華民国籍でも中華人民共和国籍でもなく、オーストラリア国籍であったということに注意する必要がある。パプアニューギニアの国籍法は二重国籍を認めていない。そのため独立を目前にし、ニューギニ・チャイニーズはオーストラリア国籍者としての立場を維持するか、あるいはオーストラリア国籍を放棄してパプアニューギニア国民になるかの選択を迫られることとなった。新たな独立国内部のエスニック・マイノリティとなることに対し、多くのニューギニ・チャイニーズは不安感を持つようになった。1960年代に旧植民地から独立したいくつかの国々でのエスニック・マイノリティへの迫害により、自己の政治的・社会的な立場の不安定さを心配するようになったからである。またこの時期、ニューギニ・チャイニーズは土地の使用についても悩まされることとなった。パプアニューギニア独立を目前には、ラバウル周辺の現地住民の中にはそれまでニューギニ・チャイニーズが使用していた土地の所有権を主張し、土地の返還を求める者が存在した。新たな国民国家の中の外国籍者としての立場は、このような場面でも不利益を被ることとなった。

ほとんどのニューギニ・チャイニーズはこの時までにはすでにオーストラリア国籍を

取得していたため、パプアニューギニア国内の政治状況に積極的にコミットしようとはしなかった。パプアニューギニアの首相を二度務めたジュリアス・チャン (Julius Chan)<sup>32)</sup>のような例外的な人物も存在したが、ニューギニ・チャイニーズの大部分は、政治活動を直接行うことはなかった<sup>33)</sup>。

このような状況を受け、1970年代前半から、ニューギニ・チャイニーズの中には自己の家屋や店舗、プランテーション等の資産を売り払う者や、あるいは全ての資産を処分しないまでも、一部を売却する者が増加することとなった。そうして得た資金を元に、ニューギニ・チャイニーズはパプアニューギニア独立以前からオーストラリアで家屋や不動産を購入するようになった。また家族成員の一部が先にオーストラリアに渡ることにより、パプアニューギニアで生活する残りの成員がオーストラリアに移住するための経路をあらかじめ確保することもなされるようになった。こうした移住に関する諸実践は、ニューギニ・チャイニーズの生活戦略として選択されている。第二次世界大戦後から1960年代末までのニューギニ・チャイニーズが生活の基盤をニューギニアに置いたことと対照的に、独立直前の1970年代初頭以降のニューギニ・チャイニーズは、ニューギニアとオーストラリアの両方に生活の基盤を分散させるようになっていったのである。この傾向は1975年のパプアニューギニア独立以降も続いた。

オーストラリア移住者の増加に反比例し、パプアニューギニア居住者の数は減少していった。現在ではニューギニ・チャイニーズのコミュニティは、パプアニューギニアよりもオーストラリアの方が大きくなっている<sup>34)</sup>。移住したニューギニ・チャイニーズもパプアニューギニアとの関係をすぐに断ち切るわけではなかったが、メインの居住地はオーストラリアになっていった。パプアニューギニアの独立とそれに続いた華人人口の減少により、ニューギニ・チャイニーズのコミュニティ組織は低調になっていった。オーストラリアへ移住したニューギニ・チャイニーズにとって、ラバウルの華人墓地に定期的に墓参りをすることは困難であった<sup>35)</sup>。

この華人のオーストラリアへの移住とコミュニティの縮小を決定的にしたのが、ラバウルに隣接する火山の噴火である。1994年9月19日、ラバウルに近接するタヴルヴル (Tuvuvur) とヴァルカン (Vulcan) の二つの火山が相次いで噴火した。これにより、ラバウル市街の大部分が破壊された。特にラバウル市街の東部と南部は被害が甚大であり、ほとんどの建物が火山灰と泥流によって破壊され、埋没した。ラバウル市街の南東部に位置していたチャイナタウンの家屋や商店、さらには華人墓地も泥流によって埋没してしまった。そのためラバウル住民の多くは噴火後、隣接する都市で

あるココポに避難していった。これを期にニューギニ・チャイニーズの中にもラバウルからココポに住居や商店を移す者や、オーストラリアへ本格的に移住する者が増加することとなった。1994年の火山の噴火により、植民地化から独立以降にかけてパプアニューギニアにおける華人社会の中心的な存在であったラバウルの華人コミュニティは、事実上消滅してしまった。

ラバウル以外の地域でもニューギニ・チャイニーズのオーストラリアへの流出傾向が続いた。独立以後、パプアニューギニアは社会的・経済的に不安定な状況が続いた<sup>36)</sup>。特に1990年代になると通貨の切り下げや治安の悪化等の社会経済状況が変化した<sup>37)</sup>。それでもニューギニ・チャイニーズの中には独立以降の社会経済状況の変化にもかかわらず、パプアニューギニアに居住し続ける者もあり、非常に少数ではあるがパプアニューギニア国籍を取得した者も存在した。だが独立以降もパプアニューギニアに留まって生活していたニューギニ・チャイニーズも、こうした変化を受けてオーストラリアへ移住するか、あるいは移住を念頭においた生活をするようになった。オーストラリアへの移出傾向は変わらず、コミュニティは次第に縮小し続けていった。

第二次世界大戦以降から現在に至るまでのニューギニ・チャイニーズとオーストラリアとの関係の特徴として、特に以下の二点を挙げることができる。

第一点目は家族の分散である。初期のニューギニ・チャイニーズの移住に伴う家族の分散は、一般に男性が植民地労働力として渡航し、生活が安定した後に、中国に残る家族成員を呼び寄せるか、結婚して配偶者を呼び寄せるという形態であった。これはいわば、経済活動に従事する者が先行して渡航する形態であるといえる。中国からニューギニアへの到来は、植民地における就業機会が移民の大きな誘引となっていた。しかしパプアニューギニアからオーストラリアへの移住は、中国からニューギニアへという移住とは、家族の分散の形態という点では異なっている。パプアニューギニア独立の直前以降は、経済活動から引退した者から順次オーストラリアへと移住するようになった。そうした者にとって、オーストラリアで定住する理由は、純粋に収入を得るといった目的によってのみなされるのではない。むしろパプアニューギニアの経済および社会の不安定化や、家族成員のほとんどがオーストラリアに移住してきたためパプアニューギニアに戻り働くことが困難になったためといった、様々な理由が存在する。現在のニューギニ・チャイニーズの家族の分散は、植民地期とは逆に、経済活動に従事しない者から順次、オーストラリアに移住することによって生じているのである<sup>38)</sup>。

第二点目は教育である。世代を問わず、ニューギニ・チャイニーズのコミュニティでは、子供の初等教育はニューギニアで受けさせるが、高等教育は国外で受けさせてきた。こうした国外の教育も、家族の分散の形態と同様、第二次世界大戦の前後で変化している。すでに指摘したように、戦前の香港や中国での中国語教育は、オーストラリア、ニューギニア、中国大陸における、当時の政治状況や国際関係によって可能だったのであり、それが結果的にニューギニアの華人コミュニティが「中国文化」を保持し、華人としてのエスニシティを維持することに貢献したのである。だが戦後のこれらの地域の政治状況および国際関係の変化が、ニューギニ・チャイニーズの教育も変化させた。戦前の中国で高等教育を受け、その後ニューギニアに戻って経済活動に従事するというライフスタイルは、戦後はオーストラリアで教育を受け、その後はニューギニアに戻って経済活動に従事するといった具合に変化したのである。

ここまで検討してきたのは、生きている人々の経験、および生きている人々同士の相互関係である。だが移住と定住の過程では、生者のみではなく死亡した人々との関係も問題になってくる。そこで次章では、ニューギニ・チャイニーズにとっての死者との関係が、連続的な移住と定住の中でどのように構築されているのかについてみてみたい。

## 7 墓地と移住

華人にとっての墓のあり方が、アイデンティティや移民母村との関係を顕著に表していることはしばしば指摘される。移住先で死亡した者の遺体を故郷に送り返すといった慣行や、移住先での華人墓地の設立に見られるように、移民にとっての墓地は死者と残された者にとっての場所の観念を端的に表出する存在である<sup>39)</sup>。

ニューギニア島における初期の華人がどのようにして死者の埋葬を行っていたのかは明らかではない。現在のニューギニ・チャイニーズからの説明では、かつてニューギニア島に到来したばかりの頃に現地で死亡した者の中には、中国の出身村落に送り帰された者も存在したとのことである。だがニューギニアがオーストラリア統治下に入る時期には、華人は死者をニューギニアに埋葬しており、ラバウルには華人専用の墓地も形成された。このラバウルの華人墓地は現在でも存在する。この墓地は上述した1994年の二つの火山の噴火により、ラバウル市街と共に破壊され、火山灰と泥流によって埋没してしまった。噴火で埋没する以前、華人墓地はラバウルのチャイナタウンに隣接していた。ここでは主にこのラバウルのチャイナタウンを事例に取り考察

を進める。

ニューギニアの華人社会は、隣接する東南アジアの華人社会と比較すると歴史も浅く、人口規模も格段に少ない。そのため現在でもニューギニ・チャイニーズの先祖は三世代をさかのぼることはまれである<sup>40)</sup>。またほとんどのニューギニ・チャイニーズはキリスト教徒（カトリックあるいはメソジスト）であるため、墓の様式もキリスト教的な影響を強く受けている。ラバウルの華人墓地には中国南部や東南アジアの華人社会で見られる、風水思想に基づいた、いわゆる亀甲型の墓は存在しない。また墓石の形態もキリスト教的な意匠を凝らしたのものがある。十字架の形をした墓石や、墓石の表面に天使像を彫ったものもあり、キリスト教徒としての意識を見て取ることが出来る。墓碑銘は英語表記のものと中国語表記のものが混在している。中国語表記のものには、例えば「広東開平縣○○○之墓」と個人の名前と出身地を記すものがある。それ以外にも「○門○太夫人瑪利亞之墓」といったように、中国語表記を行ないながらも、キリスト教徒として埋葬されていることを示している墓石もある。さらに華人墓地の中には華人と結婚したメラネシア人女性の墓も存在する。

ほとんどのニューギニ・チャイニーズは第二次世界大戦以前からキリスト教に改宗していたため、葬送はキリスト教式に行なわれ、神父が葬式を執り行う。現地調査時（2006年8月、2007年3月）にラバウルとケビエンで実際に立ち会った葬儀では、死者は木製の棺に入れられて埋葬された。埋葬に先立ち、華人墓地に新たな墓穴が掘られ、木製の十字架や墓石が準備される。埋葬日の午前中にキリスト教会で礼拝が行われ、死者の親族や関係者が参加する。その後、親族や関係者は車に分乗して墓地に向かい、棺を墓穴に入れる。墓地でも神父が主導して祈りを捧げ、棺を入れた墓穴に関係者が一握りずつ土を投げ入れる。墓穴はその後、本格的に埋められ、その上に死者の名前が書かれた十字架が建てられる。立ち会った葬儀は「混血」の華人の埋葬だったため、華人のみならず死者のメラネシア人の親族や関係者も多数参加した。ニューギニ・チャイニーズの死者、特に祖先に対する観念や、死や葬儀のケガレに関する観念も変容を遂げている。ラバウルには僧侶や道士といった宗教的職能者が存在せず、オーストラリアに移住した者も中国的な宗教的職能者と接触する者は少ない。そのためニューギニ・チャイニーズの葬送に関わる実践は、僑郷に住んでいる人々のそれとはかなり異なっている。だが死者やケガレに関する観念は依然として残存している。例えば死者の出た家族の成員は、一ヶ月間は他人が自分の家に来ることを望まず、知人も死者の出た家を訪れることを遠慮するとのことである。喪に服する人に対する遠慮と共に、不幸のあった家への訪問は、訪問者にも不幸をもたらすと信じられている



からであると説明される。こうした死者と不幸とに関する観念はオーストラリアに移住した者にも存在する<sup>41)</sup>。また葬式の後には参加者にアメを配るという慣行も存在する<sup>42)</sup>。

このような死に関する観念とともに、墓地では祖先祭祀や死者の追悼が行なわれてきた<sup>43)</sup>。ラバウルにおける祖先祭祀は清明節に行なわれていた。清明節の墓参を中心とする祖先祭祀は、「伝統的な」知識を持つ年配者が中心になって執り行っていたとのことである。ただしこうした墓地での祖先祭祀は必ずしも僑郷で行なわれていた様式に従っているわけではなく、単に墓前に食物や花を供えるだけである<sup>44)</sup>。

こうした墓地での祖先祭祀も、現在ではラバウルに居住する華人が激減したため、ほとんど行われていない。またラバウル周辺に居住している華人がオーストラリアへ移住してゆくため、現在ではラバウルの華人墓地に新たな死者が埋葬されることも少なくなっている。これは前述した、ニューギニ・チャイニーズのライフスタイルとも関係を持っている。現在のニューギニ・チャイニーズの中には依然としてパプアニューギニアに居住し続ける者も存在するが、大部分は仕事を引退した後、オーストラリアへと移住する。そのためパプアニューギニアに居住するニューギニ・チャイニーズの高齢者は若年層と比較し数が少ない。また現在ではパプアニューギニアでの経済活動自体を止めてオーストラリアで生活することを選択する若年層も多いため、高齢者もそうした人々と共にオーストラリアで生活するようになっている。

このような状況は、事故死や病死以外にパプアニューギニアで人生を終えるニューギニ・チャイニーズの数が減少していることを意味する。オーストラリアで死亡したニューギニ・チャイニーズの遺体は、パプアニューギニアに送られて埋葬されることは無く、オーストラリアの家族や親族が居住する近くの墓地に埋葬されることとなる。オーストラリアへのニューギニ・チャイニーズの移住の増加は、パプアニューギニアにおける死亡者の減少と、華人墓地の使用の減少をもたらしたのである。

さらに、現在のニューギニ・チャイニーズと死者との関係を顕著に表すのが、パプアニューギニアで死亡した人物の遺体を、オーストラリアに居住する親族の許へ移送し埋葬するという実践である。他の家族成員がオーストラリアに居住し、特定の成員のみがパプアニューギニアで生活している場合、パプアニューギニアで死亡した者は、死亡した場所で埋葬されるのではなく、すでに家族が居住している場所に埋葬されるのである。



事例2：ポートモレスビーで死亡した男性の例

2001年7月に60代のニューギニ・チャイニーズの男性がポートモレスビーで心臓発作により死亡した。彼はラバウルで生まれた。その後、オーストラリアで教育を受け、成人するとポートモレスビーに移り、ビジネス活動を行っていた。彼の両親と配偶者、結婚した子供たちとその孫はすでにオーストラリアに移住し、シドニーやブリスベンに分散して居住していた。彼の死後、遺体は一時ポートモレスビーの総合病院に安置された。男性の死後、すぐにパプアニューギニアおよびオーストラリアの各地に居住する家族や親族、関係者の間で男性が死亡したという連絡がまわされた。その結果、葬儀をオーストラリアで行なうことが決まり、そのための準備がなされた。数日後、男性の遺体は空路ブリスベンに移送された。同時にパプアニューギニアとオーストラリア各地の親族や関係者もブリスベンに集まり、男性の葬儀に参加した。葬儀はカトリック式に行なわれ、式後、ブリスベンに居住する遺族の居住地近くの墓地に埋葬された。

この事例では、男性の家族成員は、すでに独立した子供たちを含め、オーストラリアに移住していた。そのためこの男性も、オーストラリアに居住する家族の近くに送られて埋葬されることとなった。ここで注目すべきは、生まれ育ち、現在生活している場所で埋葬されるのではなく、家族がすでに移住しており、おそらくこの男性もいずれば移住する目的地であったオーストラリアで葬儀と埋葬が行なわれたことである。この男性の例に限らず、なぜ死者をオーストラリアに送って埋葬するのかという筆者の質問に対し、ニューギニ・チャイニーズからなされる答えは、すでに家族がオーストラリアに移住しているため、パプアニューギニアに埋葬したのでは、墓参りが出来ないし、死後も家族の近くにいる方が良いからだ、というものである。東・東南アジア各地の初期の華人が、自前の墓地を形成する以前に、外国で死亡した者の亡骸を故郷に送り返していたことはよく知られている（e.g. Yeng 1995: 34; 可児・游 1995: 3-5）。だがこの事例では、遺体が故郷、あるいは生まれ育った場所に送られて埋葬されるのではなく、家族の住んでいる、これから移住するはずであった場所に送られて埋葬されるという点が重要である。いわば、ニューギニ・チャイニーズにとってのライフスタイルの一部である、パプアニューギニアからオーストラリアへの移住が、死者との関係にも反映されているのである。

こうした墓地と居住地および移民母村との関係を考察するために、さらにもう一つの事例を見てみたい。この事例は、すでに死亡した者の遺骨の移送という点で、事例

2と似通った現象である。

### 事例3：ラバウルで埋葬された遺骨のオーストラリアへの移送

現在シドニーに居住する70代の第二世代の男性とその家族は、1988年にラバウルの華人墓地に埋葬されていた彼の父親の遺骨をオーストラリアに移送した。この第二世代の男性はラバウルで生まれ、オーストラリアでの教育を終えた後はラバウルに戻り生活していたが、1985年に一家でシドニーに移住した。彼の父親はラバウルの墓地に埋葬されていたが、すでに死亡した彼の姉妹や配偶者の親族はシドニーに埋葬されており、彼自身、パプアニューギニアに戻って生活するつもりも無かったため、父親の遺骨をオーストラリアに埋葬しなすことにした<sup>45)</sup>。彼はラバウルの現地住民を雇って父親の遺骨を掘り出し、先ずポートモレスビーに移送した。遺骨をオーストラリアに持ち込むためには検疫を受けなければならなかったからである。ポートモレスビーで棺を買って遺骨を納め、検査を受けて、空路オーストラリアに移送した。男性はシドニーの墓地に新たに父親のための墓を購入し、家族や親族を集めて、改めて葬式を行い、埋葬し直した。父親は仏教徒<sup>46)</sup>であったが、男性を含め子供たちは皆カトリックであったため、葬儀はキリスト教式に行なった。

この事例では、すでに死亡した者の子供や孫がシドニーに移住しており、パプアニューギニアに戻って生活するつもりもなく、今後もオーストラリアで生活することを前提としているという特徴がある。また男性もオーストラリアに留まり続け、子供を含めた家族もオーストラリアに居住することが前提とされているため、生活の場所を完全にオーストラリアに移したのだと言える。すでにラバウルに埋葬された男性の父親の遺骨を掘り出し、オーストラリアに移送したのは、彼にとっての生活の場所が完全にオーストラリアに移行したことを意味しているといえよう。自己の生まれ育った地であり、父親が眠る地であっても、彼にとってラバウルはすでに戻って生活すべき場所ではないのである。パプアニューギニアからオーストラリアへという華人の移住に伴いラバウルの華人墓地の使用は激減し、ニューギニ・チャイニーズのコミュニティにおける役割も変化してきたのである。

だがその一方で、ラバウルの華人墓地の意義が失われているわけではない。オーストラリアに移住したニューギニ・チャイニーズも、実際に訪れるかどうかは別として、出身地であるパプアニューギニアには愛着を持っている。特に大規模なコミュニティ

が存在したラバウルを中心とする地域に対しては、自己の直接的な経験に基づく記憶を保持している。このような直接的な記憶はオーストラリアに移住した者にも共通している。次にこのようなニューギニ・チャイニーズにとっての出身地に対する愛着を窺い知ることのできる事例を見てみたい。

#### 事例4：華人墓地の復元

1994年9月の二つの火山の噴火により、ラバウル市街は壊滅的に破壊されたが、それと同時に華人墓地も火山灰と泥流で埋まってしまった。これに対し、パプアニューギニアに在住していたニューギニ・チャイニーズの二人の兄弟が、華人墓地を掘り起こすことを呼びかけ、そのための資金を集めることになった。この呼びかけにはパプアニューギニア在住者だけではなく、シドニーやブリスベンに移住した者も応じた。墓地を掘り出す資金として約45,000キナ<sup>47)</sup>が集められた。その資金を元に、墓地を掘り出すための現地住民が約100人雇われた。機械を使用して墓地を掘り出すわけには行かず、全て人力で行なわねばならなかったからである。その結果、火山灰によって埋没した墓地は掘り出され、現在でも墓参が可能になった。

墓を掘り出すための資金の金額の多寡はここでは問題としないが、噴火による破壊後、ほとんど復旧が進んでいないラバウルの他の市街地やチャイナタウンと比較し、華人墓地がいち早く火山灰の埋没から掘り出されたことは注目されるべきだろう。ラバウルの華人墓地は、現在では埋葬される人も減少しており、オーストラリア居住者が墓参に来ることもまれである。だがラバウルの華人墓地の発掘のためにオーストラリア在住者からも資金援助があったことは、ニューギニ・チャイニーズにとって、居住地の如何を問わず、華人墓地は直接的な自己の関係者が眠る場所として、いまだにその重要性を失ってはいないのである。

## 8 考察

以上、ニューギニ・チャイニーズによる、中国からニューギニア、そしてオーストラリアへという、数世代にわたる連続的な移住と、その過程で生じたそれぞれの地域との関係について述べて来た。前述したように、こうした数世代にわたる、複数の地域での生活経験は、ニューギニ・チャイニーズにとっての生活世界を特徴付ける結果

となった。本稿の以下の部分では、このようなニューギニ・チャイニーズにとっての移住経験の特徴を分析してみたい。

ニューギニ・チャイニーズの数世代にわたる移住と定住の過程は、中国の出身村落、ラバウルやココボ、ケビエン、ポートモレスビーといったパプアニューギニアの各地、シドニーやブリスベンといったオーストラリアの諸都市を横断する生活空間を生み出すこととなった。だがこうした地域が全てのニューギニ・チャイニーズにとって均しく同じ意味を持つ空間として認識されているわけではないことが明らかである。むしろ各個人やそれぞれの世代により、これらの地域との関係には偏差が見られる。

中国で生まれニューギニアに到来した第一世代や、ニューギニアで生まれても香港や中国で教育を受けた世代にとっては、僑郷との関係は自己の生活経験や、親族や知人の存在のため、より直接的なものであった。初期の華人社会、特に第二次世界大戦以前のニューギニアの華人が他のエスニック・グループと接触しなかったわけではない。むしろ日常生活の中で、絶えざる相互交渉の過程に置かれてきたといえる。華人は植民地労働力として働きながら、ラバウル周辺の現地住民であるトーライ人をはじめとする現地住民と常に接触してきた。また初期の到来者は単身の男性が多かったため、華人男性と現地住民女性との婚姻も見られ、混血の子供も生まれるようになった。だがこうした混血の子供も華人の中で華人として育てられることが多かった<sup>48)</sup>。前述のように、混血の子供も中国や香港に送られ、中国語教育を受けさせられ、ニューギニアにおける華人としてのエスニシティを維持する役割を果たす者も存在した。そのため、ニューギニアでの長期にわたる生活や現地住民との接触は、華人のエスニック・アイデンティティや中国志向を弱めることは無かったと思われる。

これに対し、第二次世界大戦以前のオーストラリアとの関係は、中国やニューギニアのそれと比較し、より間接的な性格を持っていたといえる。宗主国であるオーストラリアは、ニューギニアにおける華人の生活に対し様々な影響を与えており、植民地期にもオーストラリア人と華人との接触は存在していた。だがオーストラリア政府がとっていた白豪主義政策のため、華人がオーストラリアに渡航することは厳しく制限されていた。オーストラリアという国土自体は、華人にとって、直接自分で経験することのできない存在であった。

このような状況からは、第二次世界大戦以前のニューギニアの華人にとって、中国、特に四邑地域は直接的な移民母村であり、ニューギニアにおける華人コミュニティは四邑地域の延長に近い存在であった、と表現することが可能である。

だが戦後の中国大陸の政治的・社会的混乱、ニューギニアにおける植民地状況の変

化、オーストラリアにおける政策の転換といった、政治的、社会的な変化は、ニューギニ・チャイニーズの生活空間も変化させた。これはニューギニ・チャイニーズにとっての移民母村と移民先の関係性を変化させたことも意味する。戦後の中国大陸の政治的变化と国際状況の変化により、僑郷との関係の維持が困難になったニューギニ・チャイニーズにとって、中国との関係はより間接的なものにならざるを得なかった。中華人民共和国という政治的な空間は、かつて国民党を支持し、ラバウルをはじめニューギニア各地にその支部を置いていたニューギニ・チャイニーズにとっては親しみにくいものであった<sup>49)</sup>。また普通話を共通語とする中華人民共和国や、普通話と閩南語の世界である台湾は、香港や広東省の一部と共通した文化的・社会的背景を持つニューギニ・チャイニーズにとっては異質な空間であった。ミクロなレベルでもマクロなレベルでも、戦後のニューギニ・チャイニーズにとって、中国と直接的な関係を結ぶのは次第に困難になっていった。

その一方で、第二次世界大戦後はオーストラリアとの関係は、次第に直接的なものになって行った。1950年代後半より増加したオーストラリア国籍の取得により、ニューギニ・チャイニーズはオーストラリアという政治的な空間の正式なメンバーとなった。パプアやニューギニアという地域に居住し、中国に出自を持つという背景にもかかわらず、宗主国オーストラリアの国民としての社会的な立場を得ることになったのである。オーストラリアでの教育経験や生活経験は、それまでは間接的な関係に留まっていたオーストラリアを、自己の直接的な経験に基づく場所としていった。数年間にわたるオーストラリア人との交流や共同生活は、彼らの生活様式にも影響を与えていった。またニューギニ・チャイニーズ同士の会話も英語が用いられるようになっていったのは、ニューギニ・チャイニーズとオーストラリアとの密接な関係を顕著に表している。このような状況の下、ニューギニアに居住するチャイニーズも次第にオーストラリア的な生活様式を獲得するようになった。いわば、戦前は中国との交流や中国語教育により、ニューギニアに中国的な生活様式がもたらされたのに対し、戦後はオーストラリアでの生活経験や英語教育により、オーストラリア的な生活様式がもたらされたのである。国籍の取得はニューギニ・チャイニーズとオーストラリアとの関係をドラスティックに変化させたといえるだろう。

さらにパプアニューギニアの独立以降、ニューギニ・チャイニーズはオーストラリアでの永住を志向するようになる。中国からニューギニア、そしてオーストラリアへと数世代にわたり移住と定住を繰り返してきたニューギニ・チャイニーズは、最終的にオーストラリアに定住することとなったのである。いわば、オーストラリアは、数

世代にわたる連続的な移住の最終的な目的地なのである。

ただ、オーストラリアで生活する者が増加し、そこでの永住も志向される一方で、パプアニューギニアとの関係も依然として維持され続けている。両地域に家族成員や資産が分散している者にとっては、オーストラリアに移住した後もパプアニューギニアは依然として自己の日常的な生活に密接に関わる場所である。

ニューギニ・チャイニーズのオーストラリアへの移住が本格的に開始したのは1970年代初頭以降であり、現在でも多くのニューギニ・チャイニーズにとって、パプアニューギニアは自分が生まれ育った場所である。これは幼少期にパプアニューギニアを離れた者や、オーストラリア生まれの世代にとっても当てはまる。このような若年層も、父母や祖父母、親族を通じることにより、依然としてパプアニューギニアとの関係を維持し続けているのである。こうした状況は、オーストラリアに居住するニューギニ・チャイニーズにとって、パプアニューギニアが新たな移民母村としての性格を持つようになってきたことを意味する。

だが中国との関係と同様、政治的な空間としてのパプアニューギニアにはニューギニ・チャイニーズは容易に参入することが出来なかった。植民地時代、主にビスマルク諸島やニューギニア島北東部沿岸で生活してきたニューギニ・チャイニーズにとって、国民国家としてのパプアニューギニアの独立は、それまで直接訪れることも生活することも無かった地域と、同一の政治的空間として統合されることを意味した。植民地期から多くの華人が居住してきたビスマルク諸島やニューギニア島北東岸は、いわば自分たちが直接生活し経験してきた場所であった。だがパプア地域やニューギニア高地といったパプアニューギニア国内の他の地域は、オーストラリア統治期には直接訪れることはまれであった。そのためこれらの地域は、ニューギニ・チャイニーズにとって間接的に知ることしかできなかった地域であった。

ニューギニア地域に居住していたニューギニ・チャイニーズが、オーストラリア領パプアやニューギニア高地に移り住むようになったのは、1960年代以降になってからである。ニューギニ・チャイニーズが国籍を取得した1960年代以降、ニューギニア高地ではコーヒー・プランテーションの開発により、ポートモレスビーではオーストラリア領パプアの首都として、ビジネス・チャンスが存在した。ラバウルやケビエン、レイ等の都市に居住していたニューギニ・チャイニーズの中にはこれに応じ、ニューギニア高地やパプア地域でビジネス活動を開始する者が出てくるようになった(Wu 1977; 市川 2003a)。だがこれらの地域での生活経験は、ラバウルを中心とするニューギニア地域での生活と比較した場合、新しいものであり、在地社会とニューギ



ニ・チャイニーズとの関係もそれほど深化しなかった。こうした自己の経験に基づかない場所と、同一の政治空間に統合される経験は、華人のエスニックなマイノリティとしての立場に不安感を与えたことは想像に難くない。パプアニューギニアの独立が、華人のオーストラリアへの移住を促進したことは、こうしたことが理由の一つとなっていた。これは、例えばラバウルやその周辺に住むトーライ人をはじめとする現地住民に対しては愛着<sup>50</sup>)を持つニューギニ・チャイニーズも、パプアニューギニアの他地域の現地住民に対してはそれほど親近感を持たないところからも理解できる。パプアニューギニアという政治的な空間に対する感覚は、ラバウルのようにかつて居住していた地域を中心とする自己の直接的な経験に依拠する場所に対する感覚とは異なるのである。

ニューギニ・チャイニーズにとっての移民母村と移民先との関係を、中国、パプアニューギニア、オーストラリアという三地域に注目することによりまとめると、以下のようになる。かつての移民母村であるが自己の直接の生活の場ではない中国、生まれ育った地であるがいずれ去るべきパプアニューギニア、いずれ行くべき目的地であり将来にわたって住み続けるであろうオーストラリア、である。こうした状態からは、現在のニューギニ・チャイニーズにとって、中国は歴史的な移民母村であり、パプアニューギニアは現実的な移民母村であるといえる。いわば、かつて移民先であったパプアニューギニアは、現在では移民母村としての性格を獲得しているのである。

この移民母村としてのパプアニューギニアへの愛着は、華人コミュニティの中心地であったラバウルが、しばしばパラダイス（広東語で天堂、*tin tong*）という語を用いて懐古されることに顕著に現れている。これは、現実のラバウル市街が火山の噴火によって破壊され、事実上、ラバウルの華人コミュニティが消滅したと深くかかわっていると思われる。こうした言説は、ラバウルを離れてオーストラリアに移住した者だけでなく、噴火を避けてココポに転居した者からもしばしば聞かれる。実際のラバウルでの生活がパラダイスであったかどうかは、ここではそれほど問題ではない。むしろ、現在では実際に居住していないラバウルを、パラダイスであった、として懐古するところに特徴がある。現在のニューギニ・チャイニーズが、ラバウルに代表されるニューギニアを、パラダイスという言葉によって、ノスタルジーの対象としている部分が重要である。

これらの地域とニューギニ・チャイニーズとの関係は、自己の生活経験や家族や親族を通じたより直接的な関係と、祖先や政治的な空間によって仲介されるより間接的な関係から成り立っている。さらに言えば、これらの地域間を結ぶ社会関係や活動領



域といった、トランスナショナルな社会空間が、どのチャイニーズにとっても均質な意味を持つわけではない。またこれらの地域を結ぶ社会空間や、世代ごとの社会空間の意味も、それぞれ変化することとなる。これは、こうした地域との直接的な関係と間接的な関係のどちらがより重要なのか、という問題ではない。重要なのは、それぞれの地域との関係は、様々な脈絡でニューギニ・チャイニーズの生活世界で異なる意味を獲得しているということである<sup>51)</sup>。

移民の連続的な移住経験の中で暮らしてきた地域は、それぞれの移民の世代ごとに異なる性格を獲得することとなる。ニューギニ・チャイニーズの生活世界は、トランスナショナルな広がりを持ちつつも、中国やパプアニューギニア、オーストラリアの具体的な地域と離れて存在するわけではない。だがこれらの地域も、ニューギニ・チャイニーズの世代ごとの生活経験に従い、異なった意味を持つのである。トランスナショナルな社会空間は均質的な存在ではありえず、個々人の生活が営まれ、帰属意識や生活経験が形成される個別の地域もそれぞれ異なった脈絡で異なった方法により意味づけられるのである。ニューギニ・チャイニーズにとっての移民母村も、連続的な移住経験と世代ごとの生活世界の変化により、異なった意味合いを持つのである。いわば、ニューギニ・チャイニーズの連続的な移住経験は、その生活空間を拡大するだけでなく、個別地域の意味合いも変化させているのである。それによりニューギニ・チャイニーズの移民母村と移住先も、それぞれの世代の直接的な経験と間接的な経験に従い、絶えず構築され続けるのである。

## 9 おわりに

移民母村はそこから出てゆくだけでなく、人や事物の往来がある場所であり、また愛着や帰属意識の対象となってきた。ニューギニ・チャイニーズたちは数世代にわたり中国からパプアニューギニアをへてオーストラリアに至るという連続的な移住経験の過程で、それぞれの時代ごとの政治経済的な影響を不断に受けてきた。そうした状況の下、ニューギニ・チャイニーズは居住地と移民母村、更なる移住先との間に、自己の経験に基づく生活の場所を構築してきたのである。これは、世代ごとに異なる中国やオーストラリアにおける生活経験や、墓地や遺体の移送に見られるオーストラリア移住後も存在し続けるパプアニューギニアとの関係からも見て取ることが可能である。

ニューギニ・チャイニーズのトランスナショナルな社会空間も、その基礎となるの

は特定の場所での直接的な経験である。そしてニューギニ・チャイニーズにとっての移民母村と移民先との関係は、中国-パプアニューギニア間から、パプアニューギニア・オーストラリア間へとシフトしてきている。中国に対する様々な関係がいまだに存在し、チャイニーズとしてのエスニック・アイデンティティを保持してはいても、パプアニューギニアが移民母村としての性格を持つようになるのは、こうした直接的な経験に基づく、特定の場所に対する関係や愛着から生じているためである。

現在のニューギニ・チャイニーズにとっての生活空間は、パプアニューギニアとオーストラリアを横断するかたちで構成されている。すでにオーストラリア国籍を取得したニューギニ・チャイニーズにとって、中国とは自己の直接的な経験に基づかない場所である。他方、かつての移民先であり、現地生まれの世代にとっては生まれた場所であるパプアニューギニアは、ニューギニ・チャイニーズにとって、新しい移民母村としての意味合いを獲得するようになってきている。いわば、かつての移民先が新たな移民母村になりつつあると表現することができるだろう。華人の連続的な移住経験は、移民母村と移民先との関係を二分法的に固定することなく、その意味合いを不断に変化させ続けているのである。

## 謝 辞

本稿は1999年、2000年、2001年、2002年、2006年、2007年、2008年にパプアニューギニアおよびオーストラリアで断続的に行われた現地調査に依拠している。特に2006年、2007年、2008年の調査は、文部科学省科学研究費補助金プロジェクト「オセアニア島嶼国におけるグローカリゼーションと国民文化に関する人類学的研究」(代表:須藤健一・神戸大学)、および文部科学省科学研究費補助金プロジェクト「パプアニューギニアにおける自然環境の資源化と『開発』思想の形成」(代表:豊田由貴夫・立教大学)からの資金援助により可能になった。本稿の内容は、国立民族学博物館の若手研究者の共同研究「人の移動に注目した場所・空間・景観の文化人類学的研究」(代表:市川哲)の研究会での発表(2008年11月6日)に基づいている。同研究会の参加者の方々からは様々な批判やコメントをいただいた。また本稿の執筆にあたり、豊田由貴夫先生、舩谷鋭先生、游仲勲先生からは多くのご指導をいただいた。本誌の匿名の査読者の方々からは大変有益なコメントをいただいた。パプアニューギニアおよびオーストラリア在住のニューギニ・チャイニーズの方々には現地調査に快く協力していただいた。関係者各位に深謝いたします。

## 注

- 1) たとえばグプタとファーガソンは、人類学的研究における空間や場所の問題に注目することにより、文化的差異をどう捉えるのかを考察している (Gupta and Ferguson 1992)。彼らは移民や難民といった国境を頻繁にあるいは永続的に横断する人々や、同一の地域に複数の文化が存在するような状態、ポストコロニアルな状況におけるハイブリッドな文化の誕生、階層的に相互に結合した空間という概念に注目し、このような状況では「ここ (here)」と「あそこ (there)」, 中心と周辺, といった線引きは曖昧になると指摘する (Gupta and Ferguson 1992: 7-8)。彼らは、皮肉なことに、実際の場所やローカリティがより曖昧になるに従い、文化的あるいは民族的にはっきりした場所, という観念がより明確になると述べる。このような問題意識から、彼らは場所が想像されるという側面に注目する。そして実際には領域化された拠り所が否定されるような状況の下でこそ、故郷や場所や共同体が想起され想像されることを指摘する。特に「故郷」との関係は異なった状態の下で非常に異なったやりかたで想像され構築されると述べる (Gupta and Ferguson 1992: 10-11)。
- 2) 例えば山本が、交通機関や通信システム等の技術的發展が近年の移民の生活世界を拡大するという側面に注目し、移民コミュニティは本国社会 (ホームランド) の存在抜きでは語れず、本国社会についても移民の存在なくしては語れないほど密接に関わっていると述べるように (山本 1996: 129), 移民を対象とした文化人類学的研究では、移民コミュニティとホームランドとの相互関係は重要な考察の対象となっている。またリーがトンガ人移民とホームランドであるトンガ本国との関係は、親族を中心としたネットワークから、同窓関係やビジネス関係、教会関係といった他の種類のネットワークが重要になっているという変化や、世代間に見られる移民とホームランドとの関係の変化に注目するように (Lee 2004: 143-146), 移民コミュニティとホームランドとの関係は静態的な存在ではなく、絶えずその性格を変化させ続けることに留意する必要がある。
- 3) 本稿はトランスナショナルな社会空間という概念を、特定の人々の社会関係に依拠した、国境を超えた広がりを持つ、物理的な空間と社会的な拡散の両方の意味をもつ存在として使用する。
- 4) 本稿では特定の移民の送出地域を「移民母村」という用語で分析するが、これは必ずしもルーラルエリアに存在する村落を意味するわけではなく、場合によっては都市部や、より広い地域社会をも含めることとする。本稿は移民母村を移民の送出地域とほぼ同義で使用するが、単なる出身地ではなく、移民にとっての社会的な紐帯や心理的な愛着といった関係性を持つ場所として、母村という表現を使用する。
- 5) イーズは、特にイギリスの社会人類学的な先行研究を参照し、移民を対象とした研究は、人類学内部で中心的であり、同時に周辺的な存在であったという逆説的な状況を指摘する。彼は、中心的であった理由として、アメリカでは人類学も社会学のシカゴ学派やラテンアメリカでの現地調査からの影響により、移民や都市化といった研究を行う伝統があったこと、またイギリスでは、労働力移動の普及や、それに伴い都市部での調査も始まったため、移民研究は社会人類学の研究分野として発達したと述べる。また周縁的であった理由として、彼は以下の三点を述べる。第一点目は、親族や儀礼といったテーマと異なり、移民は他の学問分野がすでに注目してきたテーマである点である。第二点目は、移民研究は応用研究としての性格が強く、そのため人類学者に財源を与える政府や財団と人類学者が研究する人々との関係に関する厄介な問題を提出する点である。第三点目は、移民の研究には変化と不安定性という意味合いがまわりつづいたため、機能主義的な社会秩序モデルに適用することが困難であった点である (Eades 1999: 1)。
- 6) 例えばアパデュライはグローバル化と共に進行する脱領土化を民族誌的に捉える方法について考察している。彼はグローバル化し、脱領土化する世界における、生きられる経験としてのローカリティの性質とはどのようなものであり、そうしたものを捉えるための民族誌とはどのようなスタイルをとるのかという疑問を呈している (アパデュライ 2004: 102-103)。移民を対象とした文化人類学的研究でも、過度に移民のトランスナショナルな生活を強調するのではなく、そうした生活様式の中で、個々の移民が実際に生活する地域や出身地が、移民の生活世界の中でどのような位置をしめ、どのような意味を持っているのかを明らかにす

- る作業が求められるといえよう。
- 7) トランスナショナリズムは必ずしも近年に特有の存在ではなく、歴史的な存在であることを考慮すべきであるという指摘もなされている (Portes, Guarnizo and Landolt 1999: 224-225)。
  - 8) こうした研究を行うために、研究対象地域のみを単独の存在として捉えるのではなく、複数の場に位置づける作業が必要であると指摘されている (Marcus 1995: 106; Louie 2000b: 645)。
  - 9) このような華僑華人との関係が僑郷の近代化に果たした役割に関しては現在でも注目されている。たとえば肖文燕や張宏卿は広東省の梅県を事例に取り、梅県の農業や林業、工業の近代化に華僑が果たした役割について報告している (肖 2007; 肖・張 2007)。
  - 10) 黄滋生は、外国の研究者と比較した場合、中国の研究者は海外の華人を対象とした研究よりも僑郷を対象とした研究で有利な位置を占めると指摘している (黄 1991)。福建省の僑郷に関する中国の研究者による研究史と問題点については載一峰と宋平 (1998) が詳細に論じている。また李明敏は福建省の僑郷を対象とした 1980 年代から 2000 年代にかけての先行研究のレビューを行い、最近 10 年間の福建の僑郷を対象とした研究の量が増加し、特に経済を主題とした研究が全体のほぼ半数を占めることを報告している (李 2005a)。
  - 11) このような連続的かつ多方向的な移動の過程に注意を払う以外にも、なぜある人々や地域からは移民が生じるのに、同じような状態に置かれている別の人々や地域からは移民が生じないのか、という問題を考察すべきであるという指摘がなされている (西澤 1996: 17; Cohen 2005: 108)。
  - 12) 中国への華人の帰国が、必ずしもプラスの感情をもたらすだけでなく、政治体制の違いや出身村落の文化と華人の文化との差異により、ネガティブな感情をもたらすことについては、インドネシア華人の中国への帰郷経験を事例としてゴドレイとコベルが論じている (Godley and Coppel 1990)。
  - 13) これは例えば、シンガポールに移り住んで仕事をするマレーシア華人を対象としたラムとヨーの研究にも見て取ることが出来る (Lam and Yeoh 2004)。彼女らは、シンガポールで働くマレーシア華人にとって、故郷 (ホーム) とは固定的なものではなく、出身地であるマレーシアに居住する家族との関係や、ホームとホスト社会との関係の中で構築されるのであると主張する。移民母村や移民社会そのものも、トランスナショナルな社会空間の中で絶えず意味づけられ、構築されるのだと見なすことが可能である。
  - 14) これに関しオックスフェルドとロンは、出身地に戻る移民にとって、そのような帰郷は理想に満ちたものとして想像される傾向があるが、多くの場合、故郷に関する過去のイメージは、帰郷という新たな経験により修正されると述べる。彼女たちは、帰郷する移民と故郷の人々は、別々の場での経験により異なった存在となり、さらに帰郷という経験そのものが両者をさらに異なる存在にする可能性について指摘する。そしてそのような帰郷によって、故郷についての新たな意味が創出されるのであると述べている (Oxford and Long 2004: 15)。
  - 15) たとえば王元林は、従来は僑郷として広東省や福建省の華僑送出地域が注目されてきたが、近年では高学歴者や専門家の出国が増加していることに注目する。そして中国の各地に新しい僑郷が誕生しており、学校や研究所でさえも、新たな形態の僑郷になると指摘する (王 2001)。また張応龍は、従来の僑郷研究のほとんどは村落部を対象としてきたが、都市部からの出移民の存在や、都市部に居住する帰国華僑の存在を無視することはできないため、村落のみならず都市も僑郷として研究対象とするべきであると主張している (張 2005)。程希も近年の僑郷の変化に注目し、「退化」しつつある僑郷や、「中興」状態の僑郷に加え、北京や上海といった大都市が「新僑郷」になりつつあると述べている (程 2006: 34)。これらの研究者が指摘するように、僑郷とは新たに誕生する存在であるといえるだろう。
  - 16) こうした近年のパプアニューギニアをめぐる華人の国際移動とコミュニティの概況については別稿で報告した (市川 2003a)。
  - 17) 現在のパプアニューギニアにおける華人の正確な総人口は不明であるが、およそ 10,000 人が存在すると推測される (市川 2003a)。また植民地期から居住してきたニューギニア・チャイニーズはおよそ 3,000 人存在すると思われる (Wu 1982)。だが後述するように、現在、ニューギニア・チャイニーズの大多数はパプアニューギニアではなく、オーストラリアに居住している。パプアニューギニアにおける華人社会の現状については Ichikawa (2006)、Chin (2008) を参照。
  - 18) ただしオーストラリアは自国の植民地への華人の移住や、旧ドイツ領ニューギニアから

オーストラリア領パプアへの華人の移動も制限した。そのためポートモレスビーを中心とするオーストラリア領パプアには1960年代まで華人コミュニティは形成されなかった (Inglis 1972; Wu 1977)。

- 19) Niunigi とはメラネシア・ピジンでニューギニアの意味である。
- 20) 「四邑」は他の地域を含め、「五邑」(台山, 開平, 新会, 恩平, 鶴山の五県を含めた場合) や「六邑」(台山, 開平, 新会, 恩平, 鶴山と赤溪の六県を含めた場合) と呼ばれることもあった。ただし一般的には「四邑」の名称で呼ばれることが多く、特にアメリカ, オーストラリアや欧州の華人社会ではこの傾向がある。これら四つの地域は地理的に近接し, 言語がお互いに似通っており, 生活様式や信仰, 婚姻等に関わる習俗が類似し, 同郷としての感情が存在するとされる。なお鶴山県は, 言語や民俗の方面で客家の文化に近いが, 四邑地域と歴史的に密接な関係を持っている (梅・張主編 2001: 3-4)。本稿では当事者による表現や先行研究に従い, 「四邑地域」という表現を使用する。なおこれらの県は, 現在では広東省の江门市の管轄下にある (広東省地方史志編纂委員会 1996)。
- 21) 清朝初期 (17 世紀後半~18 世紀前半) に約 1 億人だった中国の人口は, 19 世紀中頃には約 4 億人にまで増加した (パン 1995: 50)。
- 22) 五邑地域では約 9%の地主が約 60%の農地を保持していたという報告もある (梅・張主編 2001: 29)。
- 23) ただし吉原は, 人口圧の高さは移民の直接の原因とはならないため, 移民を押し出す作用の要因として, 経済上昇に対する欲求の強さや, 家族・親族の増収による生活向上のための戦略といった, 移民送出地域における積極的なものに注目すべきだと指摘している (吉原 2003: 512-513)。
- 24) 例えば台山県では, 1870 年には国外に居住する台山県民は約 5,000 人であったが, 1937 年には約 9 万人になり, 1953 年には約 15 万人になっていた (台山県地方志編纂委員会編 1998: 135-136)。
- 25) 海外に多数の移住者を輩出した四邑地域は, 代表的な僑郷として, 華人社会との関係の中で調査や研究の対象となってきた (e.g. Woon 1984a; 1984b; 1989; 1991; Douw, Huang and Godley 1999)。
- 26) この時期のニューギニア島に居住していた華人の戦争経験については別稿で報告した (Ichikawa 2005)。
- 27) 中国南部の諸方言が, 中国人 (華人) 社会内部の多様性を生じさせることはしばしば指摘されている。中国南部の諸方言の話者は相互に理解が不可能になることもあるため, 同じ華人同士でも使用する方言の差により, それぞれの話者が異なるアイデンティティを持つ傾向がある (Crissman 1967; Guldin 1997)。このような華人社会内部における多様性はしばしばサブ・エスニシティという概念により研究されてきた (市川 2007)。
- 28) ラバウルには戦後, 国民党のホールや同郷会館が存在し, 中国語新聞や中国語雑誌が香港や台湾から取り寄せられていた。だが現地の華人からの説明では, 第二次世界大戦後は中国語教育を受ける者が減少したため, 実際にそれらを読むのは高齢者に限られていたとのことである。
- 29) 独立以来, パプアニューギニアは中華人民共和国を正式な中国とみなしており, 台湾とは正式な外交関係を樹立してはいない。ただし, 1999 年に一時的に台湾を中国として承認し, 国交を樹立したことがある。当時パプアニューギニアの首相であったビル・スケートは, 悪化していた自国経済の立て直しを図るための経済援助を期待し, 台湾と正式な外交関係を取り結んだ。だがこれは中華人民共和国政府とオーストラリア政府からの反発にあい, 同年中に取り消された。
- 30) パプアニューギニアの公用語は英語であり, 都市部では英語話者のパプアニューギニア人も存在する。またメラネシア・ピジンもパプアニューギニア人同士の間での共通語として普及しており, 都市部ではクレオール化している (豊田 2000)。パプアニューギニアで生活し, ビジネス活動をする華人もそのため英語やメラネシア・ピジンを話す必要がある。ただしメラネシア・ピジンが華人同士の共通語として使用されるには至っていない。またメラネシア・ピジンを話すことにより, 他のパプアニューギニア人との間にナショナル・アイデンティティが形成されるということもない。ただし, メラネシア・ピジンは外国と対比した場合, パプアニューギニアのローカルなアイデンティティの拠り所ともなるため, 華人がパプアニューギニア人に対して親しみを感じて接触する場合, 積極的にメラネシア・ピジンを使用するという状況は存在する。またニューギニ・チャイニーズの英語や広東語を使用した通



- 常の会話でも、メラネシア・ピジンの単語や表現が取り入れられることがある。
- 31) 例外として、ニューギニア本島に居住していた一部の華人は、第二次世界大戦中、オーストラリアに避難することが許された。だが大多数の華人が居住していたビスマルク諸島では、オーストラリア政府は華人を保護の対象とせず、オーストラリアへの避難も許可されていなかった (Cahill 1996; Ichikawa 2005)。
  - 32) ジュリアス・チャンは中国生まれの華人の父親とニューアイルランド島出身の母親を持つ、いわゆる混血の華人である。彼は1980～1982年と1994～1997年に二回、パプアニューギニアの首相として選出された。彼の選挙活動に当たっては、華人コミュニティからの協力よりも、ニューアイルランド島の母方親族やその関係者からの支援の方が重要であった。
  - 33) ウィルソンは商業に従事する華人が、パプアニューギニア人政治家に資金援助をすることにより、政治に関与していたと述べる (Willson 1989)。だがこうした政治への関与も、あくまでも外国籍者としてパプアニューギニアで生活するための方便に近いものであることを指摘できる。
  - 34) パプアニューギニアおよびオーストラリアに居住する華人の正確な人口を表す統計は存在しない。イングリス (Inglis 1998) は1986年のセンサスを使用しオーストラリアにおける中国系の人口とその構成を推計している。彼女によれば1986年の段階でオーストラリアには約200,000人の中国系が存在したが、そのうちの約2パーセントはオセアニア出身であり、大部分はパプアニューギニア出身であると述べている。ただしオセアニア出身者の中に占めるニューギニア出身者の正確なパーセンテージは不明である。
  - 35) ラバウルの華人社会では、中国生まれの第一世代が多数居住していた時代には、清明節 (冬至から数えて105日目) に墓参りをする慣行があった。だがオーストラリアで教育を受ける世代が増加するにつれ、清明節に墓前に参ることも少なくなり、僑郷で行なわれていた墓前での諸儀礼も行なわれなくなった。
  - 36) ポートモレスビーをはじめとするパプアニューギニアの都市部では独立後、深刻な治安の悪化が生じることとなった。独立以降、就労機会を求め村落部から都市部に流入する人口が増加したが、パプアニューギニアの都市にはそうした余剰人口を吸収できるだけの産業が発達していないため、失業者の数が増加することとなった。これらの失業者の中には凶悪犯罪に従事する者が存在し、都市部の治安を悪化させる原因となっている (Levine 1997; Levantis and Gani 1998)。ニューギニ・チャイニーズに限らず、都市部で生活している華人たちも治安の悪化に悩まされており、実際に強盗や殺傷といった被害に遭った者も珍しくない。治安の悪化はパプアニューギニアを離れる主要な理由の一つとなっている。
  - 37) パプアニューギニア政府は独立以降、国内の産業を保護する目的で、自国の通貨であるキナ (kina) と他国の通貨との交換レートを固定し、他国通貨に対するキナの価値を高く設定していた。たとえば1980年代には一キナはおよそ一米ドルと等価で交換されていた。この「ハード・キナ政策」により、パプアニューギニア在住の華人たちは、国内で得たキナを外国に持ち出し、他国通貨と交換することにより利益を得ることが可能であった。だが1994年以降、パプアニューギニア政府はキナの交換レートを人為的に高く設定することが困難になったため、通貨の価値の切り下げを実行した (Duncan and Xu 2000; King and Sugden 1997)。これにより、パプアニューギニア国内で得たキナを外国で他の通貨と交換することにより利益を得ることは困難になり、パプアニューギニアでビジネスをすることに魅力を感じなくなったニューギニ・チャイニーズが増加することとなった。
  - 38) このような家族の分散による移住と、世代間に見られる移住パターンの変化については、特定のニューギニ・チャイニーズのファミリー・ヒストリーを検討することにより詳述したことがある (市川 2003b)。
  - 39) いわば、具体的な移動と定住への注目は「生者」の経験から移民母村の在り方を考察するものであり、他方、墓地への注目は、「死者」と「生者」との関係から移民母村の在り方を考察するものであるといえる。
  - 40) ニューギニ・チャイニーズの間では、本土および海外の華人社会で一般に存在する、同姓不婚の原則は必ずしも守られてはいない。同じ姓を持つ同士が結婚することはしばしば確認され、同姓同士の婚姻については必ずしもインセスト・タブーとしては認識されていない。当事者同士からは、たとえ同姓であっても、同じ家族や親族のものではないため問題はない、との説明がなされる。ただし同姓・異姓に関わらず、当事者同士が親族であると認識されている場合には婚姻は差し控えられる。どのような関係の同姓者が婚姻可能な対象となるのか



- といった範囲については具体的に知る事ができなかった。だが現地生まれの世代が三世代をさかのぼることが少ないニューギニ・チャイニーズのコミュニティにおいては、ニューギニアに到来した時点で異なる家族や地域の出身と認識されている人々の間では、たとえ同姓でも婚姻が忌避されるわけではないようである。この問題については不明な部分が多いため、今後の課題としたい。
- 41) たとえばオーストラリアに居住する者の説明では、葬式の後は、それに参加したニューギニ・チャイニーズは直接家に帰ることをせず、仲間と共に会食をしてから帰宅するとのことである。あるブリスベン在住のニューギニ・チャイニーズによると、葬式後、そうした会食に参加せずに直接帰宅したことがあったが、その後は家の中でいさか이가絶えなかったとのことである。彼女は、こうした家庭内の不和は、葬式後、会食に参加せず、直接自宅に戻ったことがその原因であると説明した。
  - 42) このような葬儀の際に参列者にアメを配るという慣行はパプアニューギニアに居住する華人と現地住民の間に生まれた混血者にも見られる。パプアニューギニアでは特にケビエンに混血の華人が多数存在する。これらの混血華人はラバウル出身の混血華人とは異なり、華人コミュニティ内部で生活するだけでなく、現地住民の村落内部で暮らす者が数多くみられる(市川2008)。このように在地社会を志向した生活をし、文化変容がすすむ一方で、当事者たちからは、混血華人は依然として華人コミュニティに起源をもつ生活様式を保持していると説明する。その一例として、上述した、埋葬時に参列者にアメを配るという慣行が言及される。
  - 43) パプアニューギニア居住者に限らず、オーストラリアに居住するニューギニ・チャイニーズも、キリスト教という自己の宗教と、中国的な祖先祭祀の実践は抵触しないと考えている。この点に関し、あるニューギニ・チャイニーズは、祖先祭祀は宗教ではなく、祖先に対する尊敬の念の表れであり、西洋人が教会でキャンドルと使用するのと同じく、我々は線香を使用するだけだ、と説明してくれた。
  - 44) このような、いわゆる「伝統的な」方法での墓参りや祖先祭祀が行なわれない原因の一つとして、パプアニューギニアに居住するニューギニ・チャイニーズの絶対的な人口の少なさを挙げることができる。すでにオーストラリアに移住したニューギニ・チャイニーズもほとんどがキリスト教徒であるため、埋葬や葬式はキリスト教式に行なう。だがオーストラリアには香港や台湾等からの華人ニューカマーも移住してきているため、そうした人々を通じて「伝統的な」方法で祖先祭祀を行なうことが出来る。そのためオーストラリアに移住した者の中には清明節も「伝統的な」方法で行なう人もいるとのことである。
  - 45) ニューギニ・チャイニーズの出身地を含む中国南部では、一旦死者を埋葬し、数年後、再び墓を掘り起こして遺骨を新たな墓に埋葬し直すという、改葬洗骨の習俗のある地方がある。だがニューギニ・チャイニーズのコミュニティではこのような改葬洗骨の習慣は確認されていない。この事例でも特に洗骨を目的とした遺骨の掘り起こしをしたわけではない。
  - 46) 実際に仏教徒であったかどうかは不明だが、キリスト教を信仰する世代は、非キリスト教徒であった第一世代の信仰を仏教や道教と呼んでいる。
  - 47) 当時のレート(1キナが約90円)で換算すると約400万円に相当する。
  - 48) ラバウルを中心としたニューブリテン島以外にも、ニューアイルランド島のケビエンやナマタナイにも混血華人は存在した。ラバウルと比較し、ニューアイルランド島の混血華人の中には、必ずしも華人コミュニティで生活するとは限らず、現地住民のコミュニティや村落部で生活する者も存在する。だがこのような現地住民社会で生活する混血華人も、華人社会から排除されているわけではない。これらの混血華人は、母方親族から在地社会の母系クルンのメンバーシップや村落部の土地を受け継ぐことが可能になる。そのため華人コミュニティと現地住民コミュニティの双方に関係を持つという自己の資質に従い、華人コミュニティを志向した生活を送るか、現地住民コミュニティを志向した生活を送るかを選択している。この問題に関しては別稿で論じた(市川2008)。
  - 49) ウーは、1970年代初頭の調査を基に、パプアニューギニアの国民党の支部が、華人が中国人としてのアイデンティティを持つ上で重要な役割を果たしていたことを報告している(Wu 1994: 154)。
  - 50) 植民地期から現在に至る約120年の期間にわたり、共通する場所で暮らし、相互の婚姻によって関係を取り結んできたため、ニューギニ・チャイニーズの多くはラバウル周辺に居住するトーライ人に対して親近感を持っている。あるオーストラリア在住のニューギニ・チャイニーズの男性は、トーライ人は彼らの生活の一部である、と述べていた。

- 51) 海外華人と僑郷との関係は、祖先の出身地を訪れ、自己のルーツを探るという性格や (e.g. 陳 1991; Kuah 2000)、華人の投資活動等による僑郷の社会的な発展といった関係 (e.g. 周・曾 2001) 等が強調されてきた。だが同時に、両者の関係がどのような性格を持っているのかに注目する視点も求められるであろう。ルイは、サンフランシスコに在住する華人系アメリカ人と、それらの華人の僑郷である広東省の中国人とが、太平洋を挟み、直接的な訪中や探親 (親族の訪問)、投資活動、中国政府の華僑政策、中国を「オリエン」<sup>1</sup>として認識する西洋社会のディスコース等の、直接的なだけでなく間接的な諸関係によって、相互を「他者」として認識する過程について報告している (Louie 2000a: 53-54)。ルイが述べる事例と同じく、ニューギニ・チャイニーズのエスニックなアイデンティティは、中国や他地域の華人ととの直接・間接を含めた様々な関係性によって成り立っていると見なすべきである。

## 文 献

- アパデュライ, A.  
2004 『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』 門田健一訳, 東京: 平凡社。
- Biskup, P.  
1970 Foreign Coloured Labour in German New Guinea. *The Journal of Pacific History* 5: 85-108.
- Brettell, C. B.  
2000 Theorizing Migration in Anthropology: The Social Construction of Networks, Identities, Communities, and Globalscapes. In C. B. Brettell and J. F. Hollifield (eds.) *Migration Theory: Talking across Disciplines*, pp. 97-136. New York and London: Routledge.  
2003 *Anthropology and Migration: Essays on Transnationalism, Ethnicity, and Identity*. Walnut Creek, Lanham, New York, Oxford: Altamira Press.
- Brettell, C. B. and J. F. Hollifield  
2000 Migration Theory: Talking across Disciplines. In C. B. Brettell and J. F. Hollifield (eds.) *Migration Theory: Talking across Disciplines*, pp. 1-26. New York and London: Routledge.
- Cahill, P.  
1972 *The Chinese in Rabaul 1914-1960*. MA Thesis of University of Papua and New Guinea.  
1996 Chinese in Rabaul—1921 to 1942: Normal Practice, or Containing the Yellow Peril? *The Journal of Pacific History* 31 (1): 72-91.
- 陳山鷹  
1991 「從僑刊訊資料看美国華僑華人的故土觀念」『華僑華人歷史研究』1991 (3): 1-8。
- 陳 達  
1939 『南洋華僑と福建・広東社会』 雪竹榮訳, 東京: 満鉄東亜経済調査局。
- 程 希  
2006 「僑郷研究: 対華僑、華人与中国關係的不同解説」『世界民族』2006 (5): 30-37。
- Chin, J.  
2008 Contemporary Chinese Community in Papua-New Guinea: Old Money versus New Migrants. *Chinese Southern Diaspora Studies* 2: 117-126.
- Cohen, J. H.  
2005 Nonmigrant Households in Oaxaca, Mexico: Why Some People Stay While Others Leave. In Lillian Trager (ed.) *Migration and Economy: Global and Local Dynamics*, pp. 103-126. Walnut Creek, Lanham, New York, Oxford: Altamira Press.
- 台山県地方志編纂委員会編  
1998 『台山県志 (広東省地方志叢書)』 広州: 広東人民出版社。
- 戴一峰・宋 平  
1998 「福建僑郷研究の回顧與前瞻」『華僑華人歷史研究』1998 (1): 38-47。
- Douw, L., C. Huang and M. Godley (eds.)  
1999 *Qiaoxiang Ties: Interdisciplinary Approaches to 'Cultural Capitalism' in South China*. London, New York, Leiden and Amsterdam: Kegan Paul International in association with International Institute for Asian Studies.

- Duncan, R. C. and X. Xu  
 2000 Should Papua New Guinea Adopt a Strong Exchange Rate Regime? *Pacific Economic Bulletin* 15 (2): 36-45.
- Eades, J.  
 1985 Anthropologist and Migrants: Changing Models and Realities. In J. Eades (ed.) *Migrants, Workers, and the Social Order*, pp. 1-16. London and New York: Tavistock Publications.
- Faist, T.  
 2000 *The Volume and Dynamics of International Migration and Transnational Social Spaces*. Oxford: Clarendon Press.
- Firth, S.  
 1989 Labour in German New Guinea. In Lätükefu, S. (ed.) *Papua New Guinea: A Century of Colonial Impact 1884-1984*, pp. 179-202. Port Moresby: The National Research Institute and the University of Papua New Guinea.
- Gupta, A. and J. Ferguson  
 1992 Beyond "Culture": Space, Identity and the Politics of Difference. *Cultural Anthropology* 7 (1): 6-23.
- Gewertz, D. and F. Errington  
 1999 *Emerging Class in Papua New Guinea: The Telling of Difference*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Glick Schiller, N. and L. Basch  
 1995 From Immigrant to Transmigrant: Theorizing Transnational Migration. *Anthropological Quarterly* 68 (1): 48-63.
- Godley, M. R. and C. A. Coppel  
 1990 The Piped Piper and the Prodigal Children: A Report on the Indonesian-Chinese Students who went to Mao's China. *Archipel: Etudes Interdisciplinaires sur le Monde Insulindien*. 39: 179-198.
- 広東省地方史志編纂委員会編  
 1996 『広東省史：華僑志』 広州：広東人民出版社。
- Guldin, G. E.  
 1997 Hong Kong Ethnicity: Of Folk Models and Change. In G. Evans and M. Tam (eds.) *Hong Kong: The Anthropology of a Chinese Metropolis*, pp. 25-50. Richmond: Curzon Press.
- 黄滋生  
 1991 「論僑郷研究的現状及意義」『華僑華人歴史研究』 1991 (4): 1-3。
- 市川哲  
 2003a 「パプアニューギニアにおける華人の移動とコミュニティの変遷過程」『アジア・アフリカ言語文化研究』 65: 181-206。  
 2003b 「家族の戦略としての移住と世代間に見る差異と連続——パプアニューギニアの華人社会を事例として」『南方文化』 30: 45-66。  
 2004 「マレーシア華人の国際的な活動領域にみるローカルなネットワーク——パプアニューギニアにおける活動を事例として」『華僑華人研究』 1: 58-77。  
 2005 「華人のエスニシティと宗教——オーストラリアにおけるパプアニューギニア出身華人のキリスト教団体」『宗教と社会』 11: 3-24。  
 2007 「サブ・エスニシティ研究にみる華人社会の共通性と多様性の把握」『華僑華人研究』 4: 69-80。  
 2008 「混血から見るグローカリゼーション——パプアニューギニアにおける華人の土着化の諸相」須藤健一編『オセアニア島嶼国におけるグローカリゼーションと国民文化に関する人類学的研究』（文部科学省科学研究費補助金研究プロジェクト報告書） pp. 34-51, 神戸大学。
- Ichikawa, T.  
 2005 The Chinese Experience during the Japanese Occupation in New Guinea. *People and Culture in Oceania* 21: 1-18.  
 2006 Chinese in Papua New Guinea: Strategic Practices in Sojourning. *Journal of Chinese Overseas* 2 (1): 111-132.

- Inglis, C.  
1972 Chinese. In P. Ryan (ed.) *Encyclopedia of Papua and New Guinea*, pp. 170–174. Victoria: Melbourne University Press in Association with the University of Papua and New Guinea.  
1997 The Chinese of Papua New Guinea: From Settlers to Sojourners. *Asia and Pacific Migration Journal* 6 (3/4): 317–341.  
1998 Australia. In Pan Lynn et al. (eds.) *The Encyclopedia of Chinese Overseas*, pp. 274–285. Richmond: Curzon.
- 石川登  
1993 「農民と往復切符——循環労働移動とコミュニティ研究の最前線」『民族学研究』58 (1): 53–72。
- 可児弘明編  
1996 『僑郷華南——華僑・華人研究の現在』京都：行路社。  
可児弘明・游仲勲編  
1995 『華僑華人——ボーダレスの時代へ』東京：東方書店。
- Kearney, M.  
1986 From the Invisible Hand to Visible Feet: Anthropological Studies of Migration and Development. *Annual Review of Anthropology* 15: 331–361.  
2004 *Changing Fields of Anthropology: From Local to Global*. Lahnam, Boulder, New York, Toronto and Oxford: Rowman & Littlefield Publishers.
- King, T. and C. Sugden  
1997 Managing Papua New Guinea's Kina. *Pacific Economic Bulletin* 12 (1): 20–29.
- Kuah, K. E.  
2000 *Rebuilding the Ancestral Village: Singaporeans in China*. Aldershot, Brookfield, Singapore and Sydney: Ashgate.
- Lee, H. M.  
2004 All Tongans Are Connected: Tongan Transnationalism. In V. S. Lockwood (ed.) *Globalization and Culture Change in the Pacific Islands*, pp. 133–148. New Jersey: Pearson Prentice Hall.
- Levantis, T.  
1997 Urban Unemployment in Papua New Guinea: It's Criminal. *Pacific Economic Bulletin* 12 (2): 73–84.
- Levantis, T. and A. Gani  
1998 Labour Market Deregulation, Crime and Papua New Guinea's Severe Drought. *Pacific Economic Bulletin* 13 (1): 89–97.
- 李明歆  
2005a 「導言：走入福建僑郷」李明歆主編『福建僑郷調査：僑郷認同，僑郷網絡僑郷文化』pp. 1–34, 厦門：厦門大学出版社。  
2005b 「“僑郷社会資本” 解説：以当代福建跨境移民潮為例」『華僑華人歴史研究』2005 (2): 38–49。
- Louie, A.  
2000a Chineseness across the Borders: A Multisited Investigation of Chinese Diaspora Identities. In Martine F. Manalansan VI (ed.) *Cultural Compass: Ethnographic Explorations of Asian America*, pp. 49–66. Philadelphia: Temple University Press.  
2000b Re-territorializing Transnationalism: Chinese Americans and the Chinese Motherland. *American Ethnologist* 27 (3): 645–669.  
2004 *Chineseness across Borders: Renegotiating Chinese Identities in China and the United States*. Durham and London: Duke University Press.
- Marcus, G. E.  
1995 Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography. *Annual Review of Anthropology* 24: 95–117.
- 梅偉強・張国雄主編  
2001 『五邑華僑華人史』広州：広東高等教育出版社。
- 宮原暁  
2002 「周辺の素描——チャイニーズの人口移動と知識のダイナミズム」吉原和男・鈴木正

- 崇編『拡大する中国世界と文化創造—アジア太平洋の底流』 pp. 468–496, 東京：弘文堂。
- Moore, C.  
1990 Workers in Colonial Papua New Guinea: 1884–1975. In C. Moore, J. Leckie and D. Munro(eds.) *Labour in the South Pacific*, pp. 30–46. James Cook University of North Queensland.
- 西澤治彦  
1996 「村を出る人・残る人, 村に戻る人・戻らぬ人—漢族の移動に関する諸問題」 可見弘明編『僑郷華南—華僑・華人研究の現在』 pp. 1–37, 京都：行路社。
- 大塚和夫  
1999 「ポリティカル・エコノミー論の射程—グローバル／ローカルの対立を超えて」『国際交流』 83: 20–27。
- Ong, A. and D. Nonini (eds.)  
1997 *Ungrounded Empires: The Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism*. New York: Routledge
- Ortner, S. B.  
1984 Theory in Anthropology since the Sixties. *Comparative Study of Society and History* 26: 126–166.
- Oxford, E.  
1993 *Blood, Sweat, and Mahjong: Family and Enterprise in an Overseas Chinese Community*. Cornell University Press.  
1998 Still “Guest People”: The Reproduction of Hakka Identity in Calcutta, India. In Wang L.-c. and Wang G. (eds.) *Chinese Diaspora: Selected Essays II*, pp. 242–268. Singapore: Times Academic Press.  
2004 Chinese Villagers and the Moral Dilemmas of Return Visits. In L. D. Long and E. Oxford (eds.) *Coming Home?: Refugees, Migrants, and Those Who Stayed Behind*, pp. 90–103. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Oxford, E. and L. D. Long  
2004 Introduction: An Ethnography of Return. In L. D. Long and E. Oxford (eds.) *Coming Home?: Refugees, Migrants, and Those Who Stayed Behind*, pp. 1–15. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- パン, L.  
1995 『華人の歴史』 片柳和子訳, 東京：みすず書房。
- Portes, A., L. E. Guarnizo and P. Landolt  
1999 The Study of Transnationalism: Pitfalls and Promise of an Emergent Research Field. *Ethnic and Racial Studies* 22 (2): 217–237.
- 豊田由貴夫  
2000 「メラネシア・ピジンと植民地主義」 吉岡政徳・林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究』(国立民族学博物館研究報告別冊) 21: 151–173。
- 上杉富之  
2004 「人類学から見たトランスナショナルイズム研究—研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』 24: 1–41。
- Vertovec, S.  
1999 Conceiving and Researching Transnationalism. *Ethnic and Racial Studies* 22 (2): 447–462.
- Wang Gungwu  
1991 *China and Chinese Overseas*. Singapore: Times Academic Press.  
1996 Sojourning: The Chinese Experience in Southeast Asia. In A. Reid (ed.) *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asian Chinese*, pp. 1–14. Sydney: Allen and Unwin.  
1998 Upgrading the Migrant: Neither Huaqiao nor Huaren. In E. Sinn (ed.) *The Last Half Century of Chinese Overseas*, pp. 15–34. Hong Kong University Press.
- 王廣武 (Wang Gungwu) 著, 趙紅英訳  
1999 「単一的華人散居者? (英文題名: A Single Chinese Diaspora?)」『華僑華人歴史研究』 1999 (3): 1–14.

市川 新たな移民母村の誕生

王庚武 (Wang Gungwu) 著, 程希訳

2001 「新移民：何以新？為何新？（英文題名：New Migrants: How New? Why New?）」『華僑華人歴史研究』2001 (4): 1-8.

王元林

2001 「海外華僑華人与僑郷関係演變的特点」『暨南学報（哲学社会科学）』23 (4): 129-134.

Watson, J.

1977 Chinese Emigrant Ties to the Home Community. *New Community* 4: 344-352.

ワトソン, J.

1995 『移民と宗族—香港とロンドンの文氏一族』瀬川昌久訳, 京都：阿叻社。

Willson, M.

1989 The Trader's Voice: PNG-Born Chinese Business and the 1987 Elections. In M. Oliver(ed.) *Eleksin: The 1987 National Election in Papua New Guinea*, pp. 99-108. University of Papua New Guinea.

Willson, M., C. Moore and D. Munro

1990 Asian Workers in the Pacific. In C. Moore, J. Leckie and D. Munro (eds.) *Labour in the South Pacific*, pp. 78-107. James Cook University of North Queensland.

Woon, Yuen-Fong

1984a An Emigrant Community in the Ssu-yi Area, Southeastern China, 1885-1949: A Study in Social Change. *Modern Asian Studies* 18 (2): 273-308.

1984b *Social Organization in South China, 1911-1949: The Case of the Kuan Lineage of K Ai-Ping Country*. Ann Arbor: The University of Michigan.

1989 Social Change and Continuity in South China: Overseas Chinese and the Guan Lineage of Kaiping County, 1949-87. *China Quarterly* 118 (2): 324-344.

1991 International Links and the Socioeconomic Development of Rural China: An Emigrant Community in Guangdong. *Modern China* 16 (2): 139-172.

Wu, David Y. H.

1975 Overseas Chinese Entrepreneurship and Kinship Transformation: An Example from Papua New Guinea. *Bulletin of the Institute of Ethnology Academia Sinica* 39: 85-105.

1977 Ethnicity and Adaptation: Overseas Chinese Entrepreneurship in Papua New Guinea. *Southeast Asian Journal of Social Science* 5 (1/2): 85-95.

1982 *The Chinese in Papua New Guinea: 1880-1980*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

1994 The Construction of Chinese and Non-Chinese Identities. In Tu Wei-Ming (ed.) *The Living Tree: The Changing Meaning of Being Chinese Today*, pp. 148-166. Stanford: Stanford University Press.

1998 The Chinese in Papua New Guinea: Diaspora Culture of the Late 20th Century. In Wang Ling-chi and Wang G. (eds.) *The Chinese Diaspora: Selected Essays Volume II*, pp. 206-216. Singapore: Times Academic Press.

肖文燕

2007 「華僑与近代僑郷農業變遷—広東省梅県個案研究」『東南亜研究』2007 (2): 78-83.

肖文燕・張宏卿

2007 「華僑与近代僑郷工業」『華僑華人歴史研究』2007 (3): 54-60。

新会県地方志編纂委員会編

1995 『新会県志（広東省地方志叢書）』広州：広東人民出版社。

1998 『新会県志（広東省地方志叢書）』広州：広東人民出版社。

山岸猛

2005 『華僑送金—現代中国経済の分析』東京：論創社。

山下清海

1990 「僑郷としての広東省潮州地方の社会地理学的考察—華僑送出地域と東南アジア華人社会との結びつき」『秋田大学教育学部研究紀要 人文・社会科学部門』41: 149-159。

1996 「福建省における華僑送出地域（僑郷）の地理学的考察—その地域的特色と移住先との結びつき」可児弘明編『僑郷華南—華僑・華人研究の現在』pp. 38-55, 京都：行路社。



- 2002 『東南アジア華人社会と中国僑郷——華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』東京：古今書院。
- 山本真鳥  
1996 「移民とホームランド——サモア移民の世界」山下晋司他編『岩波講座文化人類学 第七巻 移動の民族誌』pp. 127-158, 東京：岩波書店。
- Yeng Ching-Huang  
1995 *Community and Politics: The Chinese in Colonial Singapore and Malaysia*. Singapore: Times Academic Press.
- 吉原和男  
2003 「解説」ユエンフォン・ウーン著, 吉原和男監修・池田年穂訳『生寡婦〈グラスウィドウ〉——広東からカナダへ, 家族の絆を求めて』pp. 507-544, 東京：風響社。
- 張応龍  
2005 「都市僑郷：僑郷研究新命題」『華僑華人研究』2005 (3): 41-49。
- 周大鳴・柯群英編  
2003 『僑郷移民与地方社会』北京：民族出版社。
- 周聿峨・曾品元  
2001 「華僑華人與広東僑郷関係の思考」『華僑華人歴史研究』2001 (1): 15-21。
- 庄国土編  
2000 『中国僑郷研究』厦門：厦門大学出版社。